秒針の音鳴り止まず

平田武夫

序

日本移民八十年祭に、マリリアに参り、計らずも平田武夫君より自叙伝〝秒針の音鳴り止まず〟の序文を依頼された。

突然のことですので、君の親交のある友よりの話を基準に序文を承諾した。

勤勉・誠実・努力の典型の君は、今日、マリリア郊外に立派な邸宅を建て池を作り、立派な俳句会場まで建てて、安住の地に悠々自適の生活を営んでいると云う。

市に自作の金閣寺を贈呈するなど優れた建築才能を持った君は、彫刻に励み数々の名作を創られ、その逸品を私も頂戴した。

又、一方俳名を一耕と号し、俳句を良くし、俳句に彫刻に稀に見る優れた芸術家である。この自叙伝は君の生涯を克明に綴った立派な記録である。

一九八八年六月十五日

マリリアにて

元ブラジル全権大使　田　付　景　一

自　序

大正中期に生を享け、少年期に両親に連れられて渡伯、以来今日まで生き抜き得ました感謝と共に、恰も本年は、移民八十周年を迎えますので、この期に及んで己れの歩んで来た過去の実話を書き残すことを決心何分にも、尋常小学程度の幼稚な綴文で、誠にお恥かしい次第、何とぞよろしくご判読を乞うものであります。

表題は、人間が生れて打出す心臓の音になぞらえて

〝秒針の音鳴り止まず〟　と致しました。

一九八八年四月

平　田　武　夫

出生、幼少の頃

父は、石川県石川郡出城村字平木、農業、平田長左工門、妻たけとの間に四男として生れ、名は長末、十七才にして大阪に出る。母は、大阪市日本橋生れ、宮崎嘉兵衛、妻千代の長女として生れ、名は一恵、母の親戚に当る佐々木商会に七年間、父が勤め、二十四才のとき、母十九才の間に大正八年四月六日に長男として生れ、命名を武夫、大阪市此ノ花区下福島、三丁目二十一番地であった。

三才の冬、火鉢の薬罐を返して顎と腕に火傷、やっと癒えた頃に、父の自転車に乗せられて、表玄関に立掛け、父が僅かに家へ入って用を足す間に、ハンドルのベルに手を掛けるため身を乗り出して転覆、ペダルの間に右大腿部を挟め骨折してしまいました。北浜の松岡病院で二カ月間、石膏に固められて、病室のドアを開けて医師が入って来られたのを嫌ったことが、うっすらと覚えが

あります。石膏を外してから跛をひいていたそうで、片輪にしたのではと両親に心配を掛けたのでしたが、医師の話では生長に従って普通に歩けるようになると云うことで、先づ安心したそうです。

大正十二年九月一日、正午、関東大震災、丁度昼食時で、食卓上の電気笠が揺れ、柱時計は止り、表向いの炭屋さんの山と積まれた炭俵が今にも崩れそうに傾き、慌しく鈴を鳴らして号外が走り抜けて行きました。

同年十一月、妹澄子生れる。

大正十三年、照ノ宮様の御誕生の祝賀提灯行列、可愛い妹と共に見物、その時の祝賀の歌〃千代田の彩も賑やかに、皇孫殿下のお誕生、こんな芽出たいことはない、万才、万才、万々才〃と歌ったことでありました。その妹がその秋、医師の誤診により、ジフテリア病のため、十一カ月の寿命で呆気なく他界、相手になってやると声を出して笑っていたのに……火葬後、四本の歯がお骨と共に出てまいりました。

大阪は火事の都といわれ、半鐘の鳴る音の早さで遠近が分るということで、二階の物干場から恐る恐る夜空の火の粉を見て、がつがつと歯の根も合わぬ恐しかったものです。

又、淀川の堤防が切れて水浸しになり、上り框まで水位が上り、下駄が浮いて流れ出したこともありました。父が水浸しになったお得意先へ舟で握り飯を配って廻った話を聞かされたものです。

或る日、夕暮れ時、友達と川へ下る石段の所の蟹捕りに行き、水

垢で滑って流されたが、運よく近くに居た船頭さんに助けられて、濡れ鼠となって連れて来て貰い、命拾いをしました。

大正十三年の暮、石川県のおじいさんが中風で倒れた知らせで、父に連れられて見舞に参りました処、大阪の孫を見て途端に快方に向ったということでした。郷里からはかきもちや花あられなど送っていただいたものです。

その頃、母方の両親は、大阪府の十三の静かな所に住んで居られ、預けられて、茶ぶ台の引出しにあった紙縒で通した一文銭を玩具にして遊び、又白い釣髭をして居られたお髭を引張ると痛い痛いと云って笑って居られたものです。時にはおじいさんの部屋を覗いたこともありましたが、半紙を咥え、大刀を抜いて障子の明りに照らしつつ、手入れをされていることもありました。棒術の免許皆伝で、四国香川県の讃岐の武士であったそうで、ご維新になって丸腰になった当時は淋しかったということでした。時にはお婆さんに連れられて、十三の河原へ、とんぼ捕り、ばった捕りに出掛け、帰りは必ず橋の袂の茶屋に寄って焼餅を食べ楽しく過したものです。

お隣りに有川さんと云う方がお住いで、ここの満っちゃんという娘さんが、よく透る声で筑前琵琶を奏でるのを聞きつつ眠りに落ちなものです。

或る日、幼な友だちと塀にもたれてお菓子を食べていたところ、マメという仔犬に頬をかまれて、狂犬でなければ良いがと心配され、赤砂糖を塗って予防しましたが、この時始めて赤砂糖の味を

知りました。
　母より三才下に宮崎家を継ぐ一人息子の作土というおじさんが居られて、外国語学校を卒業後、淀川区の島田ガラスに勤めて居られ、母より十一才下の寿恵子というおばさんは、川口町にフランス人経営の信愛女学校というのがあって、そこに通学して居られましち　大阪は工業都市の為に、二階の物干竿はいつもそのたびに布で竿を拭かなければならないほど、黒い煤がたまっていました。
　体の弱い母は、毎朝霧の立ちこめる中を小生を連れ舟津橋を渡らずに渡し舟で渡り、ごみごみした支那人街を横切り、川口町にある信愛女学校を往復しました。寿恵子おばさんは、放課後よくテニスをしていました。
　うつぼからお花とお茶の先生が時折見え、母が習っていましたが、或る日、大雷が鳴って、大変雷嫌いな方で、蚊帳を吊らせ線香を焚いて〃桑原々々〃と唱えられたのが、はっきりと記憶に残っています。
　大正十四年、下福島の幼稚園に入り、遊戯や唱歌や折紙、えんどう豆を楊枝にさして色々の形に仕上げる手芸を榊原保母に習ったものでした。運動場に四人乗りの舟形のぎっこんぎっこんがあり、砂山での砂遊び藤棚があって、時に毛虫が落ちて地を這っているのを抓み、女の子を泣かせるいたずらもしたものです。近所の富永裕弘君、柏崎英一君が友達になり、武ちゃん武ちゃんと云って親しまれました。空地に生えている相撲草の穂を絡み合わ

せて、先に首が切れたのが負けになることや、夕暮れになると五十センチぐらいの細いもの両端に布の中に小石を一つづつ入れて、これを空へ投げると、餌かと思って寄ってきた大やんまの背に引掛り、落ちてくるのを捕ったりもしました。

この頃、尾ノ上松之助、目玉の松ちゃんと愛称された俳優の真似をして、張り子の丁ン髷に大小の玩具の刀を差し、いい気になっていたものです。

電車道を渡って向う側に北洋館というシネマ館があって、牧野照子、高木新平など、その頃の人気俳優が舞台で挨拶されるのを見たものです。市川百之助の主演で落城破滅の影を映画で見ました。

大阪の天神さまのお渡りの祭礼の時は、大変な賑わいで、何台もの花電車がゆるやかに走り、水の都と云われる河々を、舟に色々の飾りをつけ、井筒に薪を組んで、火をつけて燃やしながらのお渡り、川辺には見物人が押しかけたものです。

道頓堀、中之島沿いに屋形舟の中で揺られながら牡蠣を頂く仕組みになっていて、舟の障子を開けると道頓堀の川面に赤い灯、青い灯が映り、情緒豊かな時代でした。

その年の暮に、父より十才上の兄、橋本清二おじ様が石川県から多家族でブラジルに渡ることになり、父と一緒に神戸へ見送りに行き、まにら丸で出航、名残り惜しく、テープが切れるまで見送ったことです。

同郷の方で、その頃、神戸に住んで居られた本尾権次郎さんも見送りに来ておられ、帰途この方に招かれ父がお酒をご馳走になり、酔い過ぎて、大阪駅からタクシーに乗ったものの、住所がはっきり言えず、家の前を何度も通り、小生が指さして、やっと家へ辿り着いた醜態もありました。

母の従姉に当る、当時萩の寺の住職をして居られた石原家へ、宮崎のおじいさんに連れられて訪問したことがありますが、その後、間もなく他界されました。

住み馴れたこの地も、大阪中央公設市場に指定されて立退きになり、佐々木商会は北浦江の方に移転、佐々木商会の応援を得て父も兵庫県尼ケ崎市別所町に尼ケ崎精米所を名乗って独立、同市の風呂辻町に古風な二階建てに住み、既に宮崎のおじいさんも他界されていたところから、二階に宮崎の一家、お婆さん、おじさん、おばさんが住まわれることになる。

尼ケ崎へ移る、少年期

尼ケ崎第一尋常小学校に入学、一年生の間は板家の古い校舎で、副校長の大岩先生に習いました。古い校舎は、昔、加藤清正が築城したという、格好の良い尼ケ崎城の横にあったものを取壊し、内堀りの埋立てや石垣を崩すなどして、大校舎を建てていた頃でした。

白い小さな蛇が石垣の間から出て来たり、老松の枝に青大将がいたりして、小使さんが追い逃がしたことでした。

真向いに藤田寿雄君、筋向いには鎌倉清二君、下山かおる君など学友と共に通学、組長ということで赤白の紐の腕章を付け、勇んで通いました。竹馬に乗ることを覚えたのもこの頃のことであります。

夕暮れ時になると精米所横の団平船着場が満潮どきクラゲが沢山浮いてきて、それを、膝まで水に入って岡へほうり投げておくと翌朝には溶けてしまっていたことなど。家の横にお地蔵さんがあり、お祭には向いの寿雄君のお母さんが音頭をとって、大きな数珠をもんで〝ナンマイダ、ナンマイダ〟と百回唱えながらお祈りをして、それが済むと初島で作られる赤い新藷とぶどうとを三角の紙袋に入れて子供たちに配られたものでした。

二階へ上ると宮崎のおぢさんが、楠木正成の馬に乗った絵やベートーベンの肖像画など上手に画いて壁に貼ってありました。独乙製の玩具でベルトという木ネジを使って、カタログを見ながら色々のものを組立てるものを買って下さって、組立てに夢中になったものです。

一銭玉を口に入れると菓子が出てくる仕掛けになっているものや、正ちゃんとリスの冒険漫画が流行、続いてずく小僧、孫呉空の猿の如意棒、呑ン気な父さんなどなど、毎晩の夕刊を切り抜いたのもこの頃です。

二年生になって新校舎に移る。コンクリートの三階建て二棟完

成、一棟は尼ケ崎女学校になる。二年生は三組に分れ、先生は塚本先生、始めての試みとして一組四十名の生徒のうち十五名の男生徒が女生徒の間にばらまかれた形で席につきました。横に井筒久江さん前には小野一枝さん、この人のお父さんは北米に居たとかで、お弁当にパン粉を練って油で揚げたものを持って来たので珍らしく感じたものでした。

後年、おじさんの勤めて居られた島田ガラスは、当時海外にも輸出していて、スマトラに工場を建ててそこの主任になって行くようになっていたものを封建的な母親に反対されて、残念がって居られたものです。

この頃、近畿地方に大演習が行われて、下山かおる君の兄さんが在郷軍人の上等兵の方で町内に兵隊さんを泊める世話をされていて、家でも二人の宿をしたものです。近くに桜井湯と云う銭湯があって、三助さんが良い声で福知山二十連隊龍の鳥の流行歌を唄っていたものです。

時には大阪の封切映画常磐座へ、オペラの怪人、支那のおおむ、バグダットの盗賊、宝塚の少女歌劇を母やおばさんに連れられて見に行きました。

大正天皇御崩御が十二月末、国民の祈願も空しく、国中喪章を付け暗い心で年を越しました。お正月用の餅も搗けず、父が石川県から仕入れていた餅米がいよいよモチになってしまいました。

精米所内に四畳半の居間があって、奈良県の大和からは仕事の手伝いに来て居られた坂本さん、奄美大島から来ていた藤田のぼ

んさんの二人が、この部屋に泊られていたのですが、時々鼠を追ってきた二米からの錦蛇が梁を伝って過ぎるのを見掛けたということですが、古い建物でしたから、この家の主であろうと云う話でした。又お隣りに久谷といわれる老人が一人、飴細工をして売って細々とくらして居られたが、その家の裏側に三抱えもある榎が注連を張られていて、その横の古井戸にも大蛇が棲んでいるということでした。この榎に渡り鳥の五位鷺の群が塒としていたものです。裏の家は大きな庭に朱塗りの船神神社を個人でおまつりしてあり、御殿のような大きな家で明治からの木造の団平船専門の造船業で五十名からの船大工を雇い、進水式を見に行きましたが、まるで宝船のような感じがしました。船善という屋号のうちでした。

昭和の御代に入って三月四日に弟が生れ、良二と命名され、三日の後に奥丹後の地震、丁度この時に藤田君と桜井湯へ入っていて、一番奥が子供用となっている壁の方に向いて浴中のこと、何か揺れていると感じて振り返って見ると、後には誰も居らず、只外が騒がしいので、あわてて箱から着物を出し、パンツをはいて外へとび出しましたが、男女とも裸のままで慌てふためいていたものです。宮崎のおばあさんは小生の顔を見るなり転げるようにして抱き寄せて下さったものです。藤田のぼんさんは、精米所から夕食に帰る途中船着場で小用していたところへ地震、厚司のまま川へ落込んで、濡れ鼡のまま駈けつけてくれました。母は大黒柱を背にして坐っていました。揺り返しの恐れもあり、かまどの

火を消し、精米所の横の広場に多勢が避難、夜十時になって、揺り返しのないという報道があって、それぞれわが家へ帰ったものでしたが、古い家では五、六軒、突っかい棒を修理する迄してあったものです。

新校舎の教室に囲まれて、二十五米に八本コースのプールが完成されて、この日には、この尼ケ崎の学校出身で、オリンピックで優勝された高石勝夫選手が見えられ、デモンストラソンされて、その後、大変な水泳ブームになったものであります。

塚本先生がストップウオッチを持って、四十名の生徒が一斉にプールに潜り込んで、誰が一番長く息が続くか試されたことがありましたが、頑張れるだけ頑張って頭をもち上げた時、小生が一番最後となったものです。

手工の時間にボール紙で複葉機を作ったこともありましたが、よく出来たといって学校へ残されてしまいました。絵画の時間になると野間実君と張り合ったものです。絵を画く周りに女の生徒たちに囲まれて閉口したものです。別のクラスに編入されてから、荒井謙次君と親友になり彼の家の庭に棗の木があって、屋根伝いに行って採り噛ったことがありました。又この近くに寿恵子おばさんの学友で、親達が櫓や櫂を売っている店で、その直ぐ横の舟着場へ荒井君と日曜日であったと思いますが、小鮒を掬いに行ったところ、老人が首を吊ってぶら下がっているのを見つけ、大騒ぎをしたことがありました。精米所の横の舟着場でも、巾二十米ほどの川で遊んで、時々溺れたこともあるそうです。或る時、夕

方泳ぎに出た少年が夜も帰らず、朝になって繋がれていた団平船の底に吸いついて溺死していたこともありました。お婆さんと二人暮しの子で、お婆さんが死体に取りすがって泣くのを町内の人たちも貰い泣きしたものです。その後、町内で集って施餓鬼をしました。

時には町内こぞって深谷さんの団平船で潮干狩に行きました。見渡す限り海底が砂原となって蛤などを捕り、時間になると船印に集まり獲物を見せ合ったり、弁当を食べたり、楽しい日を過したものでした。或る日、父が貸し舟を借り、坂本のぼんさん、母と寿恵子おばさん、小生と五人で川口を出て、突堤の脇に錨を下し、餌のゴカイではぜ釣りに時を過し、いよいよ帰りについたところ満潮で川口が渦が巻き、進むことが出来ず、櫂を取られるやらして、坂本さんが泳いで取戻し、やっと川口に入りました。母とおばさんは舟酔いするし、暗くなって舟着場へ着いた時は、町内の方方が心配して集って居られました。

風呂辻町内に樋垣さんという馬力屋さんが居られたが踏切りを通るとき感電して倒れたのを、父が応援してあげたこともあります。又、父の少年時代の同組生で大阪へ出て生活に困っていられた人を出来る限りお世話したものです。

時には、饅頭笠を冠った托鉢僧が重くなった頭陀袋をお金と替えるために精米所に来て居られたこともありました。夕方になると虚無僧が尺八を吹きながら、門口に立っていることもあります。少し寒くなると夜泣きうどんの屋台が、チャルメラを鳴らしなが

ら通り美味しいしっぷくうどんを買って貰ったなども懐かしい思い出の一つです。

父は大変な野球好きで、甲子園も近いし、高校野球が始まると坂本のぼんさんに仕事を任せて泊りがけで見物に夢中でした。時には町内の方と連れだって沖に出て、自転車の輪に大刀魚の頭などしばり、海に沈めて置くと蟹が重なり合って輪にのっているのを、米の箱に幾箱も捕り、町内に配ったこともありました。自転車の後に乗せられて武庫川尻の海辺で釣ったこともあります。その頃、武庫川尻には立派なゴルフ場もありました。さっぱり釣れない日で、帰る支度をしていると、近くで地曳網を曳いていて、網から洩れた五、六キロもあるすずきが磯の近くに浮いているを見付けて父が厚司のまま入っていって掴え、又、小鰯が磯に打上げられて真白になっていたのを籠に詰め込んで帰りました。

大道筋の先に辰己大橋があり、その向うの城島海岸に癩病患者を収容した三棟の平屋がありました。父は商売上、米を配達に行き、中の様子を話していたことがあります。送金はしてくるそうですが、出身地は隠されているそうです。痛む人、痛まぬ人、神経癩、血清癩といろいろあり、崩れている人、また何所にもそれらしい所が見えないでも一点が癩という若い女も収容さると云うこと。落語やシネマ慰問に次々見えるそうですが、笑いの失せた淋しい生活。後に風水害のため根こそぎ沖の方へ流されたと云うことを聞きました。天王寺の鳥居前には物乞いの癩患者がうようよいたものです。

昭和三年のご大典、国を挙げての大祭、これに輪をかけての尼ケ崎独特のだんじり、鐘、太鼓、笛、各区から繰出される神輿が大道筋を暴れる様は、警察も手に負えないものでした。ぶつかり合う神輿は凄い勢でこの行事は桜井神社から辰己大手橋の間で行われ大変な賑わい。もともと尼ケ崎は労働者や漁師が多く、気も荒かったものです。学校の祝賀行列には、小生も学徒の列で小旗を振って練り歩きましたが、弟・良二がお婆さんの背に負われて、町角から見て喜んでいたそうです。

三輪車で米配達に行く坂本のぼんさんに連れられて行き、帰りの辰己橋の手前に今川焼の店があり、甘党の坂本さんと一緒で買って帰り店でみんなと頂いたものです。

子供用の自転車を買って貰い、近くの得意先へよく配達しました。第一尋常小学校の裏通りに花柳街があって、子供が通るのを禁じられていたのでしたが、配達の帰りに自転車で通ったことがありました。前の方を女の方が酔って裾を乱して歩いていましたが、見苦しく感じたものでした。

桜井神社の境内の横にマキノの桜井座、シネマ館、福知山線路横には、松竹の平和館、西大手橋の向うには日活の坂井のクラブシネマ館があって、当時の日活の修羅八荒が続編上映、大変な人気を呼んだものでした。

背中合わせになっている尼ケ崎女学校の校庭に、昔加藤清正が築城と同時に造ったと云われる高さ二十米ほどの築山があって、戦死した武士の墓石も三、四ヶ所木蔭にありました。

学校の裏に、その頃珍らしかった赤瓦の洋館が六軒ほど建ち、ここに学友の東浦みさお君と照一君が住んでいて、よく遊びに行ったものでした。東浦君は、東京震災後、尼ケ崎へ引越して来られたということで、寒い時には、校庭でラグビーの奪い合いや、三年生のリレーの選手の一人となり、小生もラストで四年生の選手を追い越し、声援を受けたものでした。

お茶屋橋を渡って、中之島には桜井の殿様が遊興されたと云う朱塗りの茶室も、この当時はそのままに残っていて、茶室の先の川辺で鮒釣りをしたものです。

初島には学友の戎　九一君が住んでいて、彼の父や兄さんが田圃の中にピアノ工場を持っていてピアノを組立てる段階を見たものです。九一君の兄さん達はよく庭で剣道をされていましたが、竹刀さばきがすぐれていて、きっと有段者であったろうと思われました。

大和から働らきに来て居られた坂本のぼんさんが兵隊検査で郷里へ帰られることになり、父に連れられて当時丹羽市といっていた或る宿に泊りました。夕膳に向ったとき父が〝天理教のおみき婆さんはえらい人やなア〟と女中さんに申しましたところ、女中さんは顔色を変えて〝お教祖さまと申すものです〟と詰られ、これには参ったと云っていました。

父、精米所閉る、転校

坂本さんも入隊されるし、昭和の不況の中で米の貸金も取れず、前年の餅米の損失に続いての痛手を深くて、深刻な状態に立到ったようでした。

五年前にブラジルに渡られた橋本清二おじさんからの手紙で、不況の日本を出て、ブラジルで働らけば、五年十年で儲けて挽回も出来るというので、ブラジル行きの決心がついたものでした。

宮崎のおじいさんの三回忌の法事も済みましたが、第一に弱い母を連れて行くことには宮崎作土おじさんが真反対で離婚の話まで持ち上りましたが、結局ブラジルでは母には働らかせないということと、酒は絶対に飲まぬと約束をしてブラジル行きが決りました。小生はせめて中学を卒業する迄、宮崎のおじさんが引取って、卒業後ブラジルへ送ろうと云って下さいましたが、弟はまだ三才で、家族の働らき手が悪いようでは成功は望めないと云うことで、一緒に行くことになりました。精米所を閉め、一時、東淀川区堀上町へ移って整理にかかりました。小生は三年生の終る迄宮崎のおじさん方に残り、三年修業後、美津屋尋常小学校へ転校、土曜から日曜にかけて堀上町まで行くのには、尼ケ崎の大物駅から西野田の終点で降り、省線で野田から中津迄、つぎに急行で神崎駅で下車、始めのうちは乗車するともう下車の構えをとったものです。神崎駅から武田製薬の塀に沿うて三百米程の所でした。まだ新開地で田園も多く、田舎風が残っていて、二階から見晴らしの良い所でした。

美津屋小学校では真鍋先生に習いました。夏休みの八月末には

ブラジル渡航のため退学のことを母が先生生方へお届けに行くと、九月からは組長になることになっていて、君がブラジルへ渡ることは実に惜しい、ブラジルでも一所懸命頑張りなさいと云って下さいました。

西野田から天六行きの省線で中津で下り、阪急に乗替えるブリッジから、田圃の中に府立中津の中豊校が聳えて見えていて、小倉の服に白の脚絆で通学する姿を夢見たこともありました。

七月末には父の甥に当る小野栄次郎さんが、従妹の本尾春栄さん十三才を構成家族に加えて、もんてびでお丸で神戸を出航され、お見送りに行きました。

八月に入り石川県の父の生家へお別れに行きました。

おじいさんは既に他界されていました。稲刈りから毎日のようにお昼には西瓜を食べ、広い庭、広い座敷、田舎暮しとはこんなにも良いものか、ブラジルもこんなであれば良いかと夢を描いたものです。すぐ一キロ位の処は日本海で、荒波を抜き手で泳いで行く様は実に勇ましく感じました。父も十七才までこの荒波で鍛えていたもので、上手に泳いでいたものです。

片方は中部山岳、晴れた日には白山が聳えて見え雄大な感じでした。金沢へも行きましたが、この電車ののろいのには、あきれたものです。市中を流れる犀川には水よりも真鯉と緋鯉とが多いように感じるくらいに橋から見て遊泳しているのを眺めました。おばあさんは胡桃の実を採って来て皮を剥き渋で指を真黒にして、

ブラジルで植えるようにと云って包んで下さいました。
松任市の藁を原料とする紙工場が火災を起し、村の青年達が火消しに行くのだと云って出掛けましたが、藁に火がついてはどうにも手の付けようもなく全焼、夜空を真赤に染めて燃えるのが、遮るもの一つ無く燃え尽きる迄眺められました。

ブラジル渡航、弟の麻疹

八月二十日、本家を始め親族、父の友人多勢に松任駅まで見送られ、名残り惜しく万才万才で送って頂きました。
堀上町の家の隣りにボブという菓子工場があって、独乙人と共営ということでしたが、母がチョコレートやドロップを買って航海中の準備の品数に入れましち父の姉の嫁いでいた山口次三郎氏は、西淀川区老海江町に住んで居られたが、この方の構成家族として加わり、柳行李に、ブラジル行山口次三郎様方、平田長末と筆で書いたものです。次三郎おじさんと父の姉のひな様おばさん、従姉の良子さん、従兄正司君、小生ら四人、計八名の構成家族で神戸移民収容所へ向う。
八月三十一日、夏休みの終る日に一万屯の貨物船はわい丸に乗船、宮崎のおじ、おばさんが見送りに来られ、決して五年や十年で帰れる筈はない。これが最後の別れになる、と申して居られました。色とりどりのテープを投げ交し、神戸の学生がランチで蛍

の光で送って下さいましたが、港が見えなくなる迄甲板で茫然と放心状態でありました。

この夜は沖で停泊、翌早朝より瀬戸内海を通り、両岸の景色を眺めつつ巌流島、佐々木巌流と武蔵が一騎打ちをしたという島を抜け、夕刻関門海峡を通って門司に入港、石炭の積込みが始まり、紺がすりの女人夫が天秤棒で狭い板を渡って石炭を運ぶので、重労働だなアと感じました。

石炭の積込みが終って出航、一九二九年九月二日、玄海灘に出て、いよいよ日本とお別れだ、いつの日に帰って来られるのだろうかと思った瞬間、涙が頬をつたって流れたことでした。

三日の後、香港着、船酔いの連中は金だらいを置いて食事どころではありません。母は弟を抱いて酔い、山口さん方はおじさんの外は三人とも頭が上らない有様でした。弟が夏虫のおできが出ましたが、幼児は殆んど、これに悩まされました。世界三大美港の一つ、香港には夜に入港、山に囲まれた港町で美しい夜景を眺めましたが、明けてみると港内狭しと舟暮しで、濁った水を飲み、実に不潔な感じ、コレラやチブスを恐れて上陸は禁じられていました。航海中は食堂になっている所を開いて船倉からクレーンの上げ下しをするので、食事は家長がバケツで運んで来て各ベッドで食べます。米麦半々のようなご飯にお菜はジャガ芋と玉ねぎ、牛肉の細切れで一貫していました。小生はよく甲板を走って運動したので、いつも空腹でおいしく頂きました。時には潮風で咽喉が渇き、かたくりなど作って食べました。

真水は一家に一リットル程で、父が弟のおしめを洗うのにも海水を使いました。香港を出航してサイゴン港着、河口から小半日、濁流を溯りました。ここも不潔の感じで上陸は出来ず、河の両岸は平坦な田園で米は刈られた後でしたが、貧しい農家が点々と見え、放飼の豚も見えました。父もサイゴン米を扱ったことから、見た目は美しいが味は落ちると云っていました。次はモンバサ港、夕方入港して翌早朝に出航、その次かシンガポールでした。丸木舟で寄って来て、甲板から水中へ投げる硬貨を、ひらひらと底に沈むまでに水に飛び込んで拾い上げる芸を見せ乍らの乞食でした。手真似でしきりに頼んでいるようで、五銭玉でも投げようものなら五、六人も飛び込んで我れ先にと奪い合いをするのでした。

次はコロンボ港ですが、赤道直下の印度洋は油を流したような海だと聞かされていましたが、この時は、大波で船酔いも多く、赤道祭の運動会や演芸会も行われましたが、船酔いの人たちは、それどころではありませんでした。この頃になって幼児の間に麻疹が流行弟の良二もかかりました。高熱で失心、母は舌をかませないようにと口に指を入れたり、隣の波江さんが、顔に水を吹きかけるなどして息を吹き返しました。船が大揺れで、スクリーが空転する音又棚から瓶が転がる中を転がるようにして医務室に知らせに走り、医者と看護婦さんが来られて、腿に一五グラムの食塩注射、翌日隔離されましたが、母がずっと付き切りで、緊張のためか以後船酔いが止まりました。この麻疹で幼児が二名水葬されました。日の丸の旗に句んで汽笛を鳴らしながら船尾から葬るの

でしたが、弟も危いところを助かったものです。

アフリカのダーバン港に着きました。沖仲仕は、お腰を巻き頭布を冠り、煙草をかんでは所かまわず唾を吐き散らします。埠頭では呑気そうに木靴の音を立てて歩いていましたが皆黒人でした。

上陸を許されましたが、市中は排日思想が強くて、ジャパン呼ばわりをされ、いやな感じでした。人力車に二人も乗せて軽々と曳いている車夫が鳥とも獣ともつかぬ格好のインジアン姿は珍らしく思いました。ダーバンからケープタウンへ、ゴリラ、豹の檻が甲板の角の方へ積み込まれました。航海中におかしな雲が垂れ始めたのを正司君が見付けましたが、これが竜巻で海水を棒状に雲の上に巻き上げたものです。しばらくするとそれがスコールになって降り出し、船員が甲板へ防水布を被うたり、時には椰子の実の殻を二つに割ったもので甲板をごしごしと洗って居られました。

船長はがっしりとした体格で、眉毛の濃い頼母しい風貌で、時には甲板で移民の中から剣道の出来る者を相手にして居られましたが、遂に相手になれる者は現われませんでした。

海の荒れた朝など飛魚が甲板に跳ね上ったり、船尾から残飯を落すと海豚の群が追って来たり、鯨が背を見せて汐を噴いていたりしました。大荒れの時はマストが波の底に沈み、水平線より下っては又波の上に浮ぶ有様でした。幾日も陸の見えない航海を続けて後に陸が見えたのが、ケープタウンの喜望峰でした。見えてから着くまで半日もかかったものです。

上陸しても古びた町で、やはり排日がひどく良い印象はありませんでした。大きなザボンを買って中の実が小さくて皮だけを買ったようなものでした。やはり獣のような格好の人力車夫が走っていました。

ブラジル上陸、義務農年

ここを出港すると直線コースで海ばかり見ながら一週間、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロに向いました。美しいリオの夜景を見て上陸、模様入りの石畳の大道路が美しく、ブラジルの首都の立派さに驚ろきました。一泊の後に出航して翌日にサントス港着、午後二時頃で濃霧のためか、暑い筈のブラジルで、ジャケツを出して着たものです。日本から五十八日目、十月二十七日でした。五時頃から荷物検査が始まり、五米程の滑り台から下ろされる仕組みで、行李の縄の切れたのを自分の名前を見て引取り、縄を締め直さねばなりませんが、父は米俵を締めた経験から、山口さんの方のも引受けてやったものです。夜中すぎに終り、その夜は船泊り。翌朝、船長さん、船医さん、船員さんにお別れをして、移民列車に乗りました。バナナ園を過ぎて海岸山脈にかかり、鋼鉄のワイヤーで列車を引上げて行く珍らし仕組を見ながら登り切り、サンパウロ市の移民収容所に入りました。ここはもと兵舎であったとか、二階建ての古い建物でした。二階には四十家族ほどのイタリア移民が入っていました。食事は油ご飯に油フエージョン、

マカロンに肉の細切れの混ぜ合わせでしたが、始めてフエージョンが美味しく頂けたものです。

翌日になって配耕先が決まり、受入れ地主の代理の菊地さんという方に連れられて六家族がノロエステ線ペンナ駅ボアビスタ耕地に行くことに決りました。収容所で二日間、休養のあと、弁当に大きなパンにケージョやモルタデイラを沢山持たせてくれました。多勢の同航者とお別れして、菊地さんに引率され、山口次三郎さん、秋田県の吉田さん、福井県の岡田さん、静岡県の所川さん、市川さんと共に移民列車に乗り込みました。途中で勝手に下車しないよう各車に錠を下して、サンパウロを発ちました。

雑木林や牧場やコーヒー園とあまり変化のない風景を眺めながらがたがたと粗末な列車で走りました。車内に鑑札付きの乞食がいて、誰も食べないモルタデーラを貰って袋に一っぱい詰めこんでいました。鑑札付きの乞食とは珍らしく思ったものです。

夕方にバウルー駅に着き、ここのポルトガル人のホテルに泊ることになり、菊地さんの取計らいで油の入らないご飯にして貰ったものです。翌早朝、ノロエステ線の列車に乗り、昼頃ペンナ駅着、耕地からトラックが来ていて、一同、コーヒー園の耕地へ夕方着きました。耕地では石川県出身の古本さんと云う旧移民の方が夕食の準備をしていて下さいましたが、カルネセッカには誰も手を付けなかったものです。ただ隠元豆と諸のテンプラを珍らしく頂きました。食事が済んでからそれぞれの住家へ案内されましたが、棟割り長屋で、五百米ぐらいの所に三十棟ほどの板家が並

んでいました。

小生方に当てられた家は五米に五米で、二米平方の炊事場があり、電灯はなく、古本さんから小さなカンテラと四枚の板を借りてきて、土間に莚を敷いて一夜を過しましたが、母は涙を流していました。コロニアの建っている前は共同の豚を飼う有刺線が張られ、裏の方にも有刺線が張られていて、コーヒー園に行くのにこの有刺線を越えるには四段に切株が埋めてあってそれを階段として跨いでいきました。便所はなく、豚のマンゲロンの中で用を足し、井戸は五、六軒置きにありましたが、汲上げの縄が太くて母の力では到底及ぶものでなく、三日目にはホームシックで頭が上らなくなりました。この間、山口のおばさんには、随分お世話になったものです。

コーヒー園の仕事に取掛りましたが、何分にも足の弱い母のこと、菊地さんに頼んで一番近い所を割当てて貰いました。十一月のコーヒー園は大草になっており、容易には捗りませんが、間もなく前方から耕地差し向けの人夫が除草を始め出し、大半片付けてくれたので助かりたと思っていたら、あとで勘定から差し引かれていました。母の枕辺で米の水加減を教わってはご飯ごしらえも致しました。果物も野菜も乏しいところでしたから隣りのコーヒー園で四年契約をされている沖縄県の方が捨てられた時無大根の葉を拾って来たり、ピッコンやカルルの葉なども食べたものです。

昭和五年元旦、ブラジルでの始めてのお正月でお餅がわりにパ

ン粉で鏡餅を作り、古いフエージョン、黒砂糖でお汁粉をして祝い、菊地さんのお父さんは海軍少尉とか、日系人を集めて四方拝祝賀の音頭をとられました。母が床に状せがちで、二カ月に一度くらいペンナから来ることになっていた医者に診て貰った所、転地療養せねばならんとのこと。父も困っておりましたところ、沖縄県人の親川さんと云う旧移民の方の甥ごさんがゼツリーナで薬局をしておられ、良い薬があるからと云って直ぐ持って来て下さいました。この薬を飲むうちに健康を取戻し、畑への弁当運びも出来るようになりました。この方が命の恩人であったと後々まで感謝いたしました。

受持ちのコーヒー園に米を蒔きましたが、近い所は放し飼いの鶏に食われ、遠い所は牛追いの群に荒されて全くの無収穫、他の方達は若コーヒーで離れた場所であったために一年分の食料を収穫されました。コーヒーの枝に雨ガッパを掛けて置いたら、夕方帰りには赤蟻にボロボロにされたことや、夜中にこの赤蟻にお米を担ぎ出されたこと、又、蟻の襲来で、しばらく外へ避難するなど色々のことがありました。親川さんがら黒い鶏を分けて貰い十二個の卵を抱かせたら、全部雛が生れ、家の片隅で寝かせて置いたら羽虫が湧いて蚤取粉などと大騒ぎしました。

隣りのブラジル人は、母親と嫁さんと二人で、木切れに巻いた糸を木枕の両方に垂らしてレース編みをしていましたが、幼女二人ある夫が肺病で耕地に借財が溜り、追出されて行ったものです。

半年後に日本移民が配耕されて来て、福島県の佐藤等さん、佐

藤喜長さん、高橋さん、京都府の中村さん、滋賀県の野寄さんなどで、コロニア内も賑やかになりました。或る日、吉田さんから皿に山盛りの肉を頂き吉田さんは大した景気だなアと思っていましたら、後日聞くと、野良犬の肉だったと云うことで、アッと思ったが後の祭、秋田県では赤犬や蛙は常食にしていると云うことでした。

栄養不良で鶏目になる人も出ましたが、トカゲや鈴蛇を食べたり、父が日本から持って来ていた霞網で小雀を獲って皆に分け合い、体力を補ったものです。

除草のことについても監督はうるさく云うのでしたが、何ごとも一年生のつもりで習う考へでいれば良かったものを、福井県の岡田さんが、木の皮をピストルの形にして、タオルを被せて監督に向けました。監督が両手を上げたまでは良かったのですが、ついて来ていた二人の子分に木の皮であることを見破られ、殴る、蹴るの打撲を受け、それがもとで他耕地へ移られてから腰のカリエスになり、四十代の若さで他界された、と聞いたものです。

コーヒー採りは布を敷いてそれにもぎ溜めていくのですが、力が足りない為に父に叱られ、半泣きになって働らいたものでした。起き鐘と出鐘とを間違えて三キロ米先に着いたが夜が明けず、コーヒーの根本で一ト寝りして夜の明けるのを待ったこともあります。コーヒー採取中のことでしたが、福岡県の川崎さんが言葉が少々解るところから監督の不法を詰ったことで監督が、小鉈のついた杖で横面を切り上げました。出血が激しく皆で応急処置を

してペンナへ走り、命は取り止めましたが、大きな傷跡が残りました。この事件で監督は免職になりましたが泣寝入りになってしまいました。耕地内ではまだ奴隷の風習が残っているのでした。

上塚第二植民地、コロノ生活

九月で一年間の義務を果し、山口さんと共にゴヤンベの第二上塚植民地へ移ることになる。行動を共にした同航者の方々も四散したことです。父もよく働らきましたが、もともとの酒好きで、強い火酒を豚の脂粕を肴にして晩酌を楽しんでいたものです。父の兄、橋本清二おじの世話で、上塚第二植民地コラソン区の長野県出身、阿部清氏耕地に入り、山口さんは五千本当方は四千五百本、そのうち半分は五十センチ程の新コーヒーで、間作にキの字蒔きに米を作ることで、一年間の手入れ賃なしという契約。既に埼玉県の鈴木さんも居られ、四年契約の愛媛県の野本さんも居られました。

この阿部耕主が見廻わりの時は、いつも重いピストルを腰に着けて居られるので、日本人同士の我々に何でピストルが必要なのか解せなかったのですが、野本さんの話では前年、雹害を受けた二家族の方が喧嘩別れになり、いつか復讐される恐れからと云うことでした。

阿部清氏は大正八年に三万円持って渡伯、レジストロに入植、のちガルサへ移り、又このコラソン区でも一等地を選んで入植、

三〇アルケールの地主、四万本のコーヒー園でした。次男の貫一氏は松本中学を卒業しておられ、ゴヤンベ郡内の連合青年会の連続会長というインテリーでした。長男・勇氏が耕地の管理、二人の妹さんもまだ誰も独身の方でありました。

十月末に妹が生れ敏子と命名されました。翌年一月には山口さん方でも正司君の下に十五才も年下の弟さんが生れ、良一君と命名されました。

昭和六年に入ってブラジル学校に入学、ゴヤンベまで二キロでしたが、絵画の時間は校舎を写生したのがよく画けているといって女先生か返してくれませんでした。この学校通いも三ケ月で退校、父の手助けに従いました。

橋本のおじさんはシエンシア区の熊本県人、亀井満氏方の六年契約で、日本人会の学務員をされ、小生の母が体の無理が出来ぬところから日本語の先生をしてはとすすめて下さいましたが、弱い体で欠席するようなことがあってはと辞退したものでした。父も頑張って受持の仕事の外に耕主のコーヒー干し場造りの土方に出たり、重労働に耐え、身を粉にして働らいたものです。

稲は順調に稔って、約百俵の収穫を上げ、五月になるとコーヒー探りに入りました。豊作の年でしたが、近くに住んでおられた熊本県人の松田さん親子三人が、仕事の虫のような方で、星から星までの仕事ぶりに父も励まされて働らきました。父がラステーラを使い小生が貫一さんから習ったペネーラで朝日が昇る頃には二俵のコーヒーをサッコへ詰めていたものです多い日には二

十三俵のバナコーヒーを行ったこともありました。

六月の火祭のあと小量の雨があり、二十七、八、九と三日間の大霜、始めの日の霜の朝、昭和四年二月、渡伯の橋本おじの兄に当る本尾小三郎さんの三男・利明さんが見えて、えらいことになった、橋本おじのコーヒーは全滅との知らせ、まだ今夜も危いようだから　コーヒー園で焚火をしたいと云うことで、父と山口のおじさんと加勢に行きました。そして夜通し火を燃して廻ったが、何の足しにもならなかったと云って帰りました。地主と契約者との間で問題が起きたものでした。

スイス耕地も阿部耕地も高地帯のみを残して全焼、峯から見渡すと一望枯れ果ててしまい未来の大都会との噂のゴヤンベも一朝無惨な姿に恋貌してしまいました。

原始林も三十キロ米ぐらいに亘って落葉し、幾日も幾日も山火事が続いたものでした。九月に入り、日本を一ケ月先に出られた中野栄次郎さんもモジアナの耕地からグロリア区の井坂耕地に来ておられたが、そこへ山口さん家族が移って行かれ、その山口さんの跡へは、グロリア区から藤本さん一家と熊本県人の方でスイス耕地から鳥取県人の小谷芳蔵さん家族が移転して来られました。

或る日のこと、近所の野本さんを訪ねて来られた人が、野本さんが不在の時で、当方へ聞きに寄られましたが、父が表戸を開けて一目見るなり、大阪で同業の米屋であった字森さんと云う人でした。やア、平田さんかと云って懐かしく、ブラジルで偶然巡り

合ったのでした。この人は愛媛県出身で父より四年程前に渡伯現在ベラクルース郡内で茶園を経営されていると云うことでした。

十月の或る日、父が弟を連れて地主の貫一さんの車で米をリンスへ出荷しました。雨のためその日は帰えられず、リンスで一泊して翌日帰りましたが、僅か二日の間に、まだ一才前の敏子が急病で亡くなってしまいました。近所の山口さんと云う日本で薬局をされていた人に見て貰ったり、ゴヤンベの泉というお医者さんを呼びに行きましたが、雨の急坂でペデボーデ車が滑って坂かかって来られた時には既に駄目でした。

この年はブラジルで革命の起きた年で、阿部さん方でも新らしい車を徴発されて、大変な痛手を受けられました。霜のあとで蔭のないところから、何処も彼処も火草になり尺取虫が大発生して、革を食いつくした後、稲もトーモロコシも、アッという間に丸裸にされてしまいました。

阿部さんの若コーヒーは成長して収穫期に入り、藤本さんや小谷さんの長女の婿の江原岩造さんらとコーヒーもぎの競争で、十指とも逆むけになり、血を吹き出したりしました。

雨の降る中でコーヒーの芽掻きに出て風邪をこじらせ、頭が上らない迄に弱りました。その時、グロリア区に、日本で看護兵だった松谷さんが居られ、看て貰い、ゴヤンベの佐野薬局で指定の薬を買って来て貰いましたが、この薬を全部服まないうちに良くなり、以後元気な体質になりました。

この年、藤本さんはアリアンサへ移られ、小谷さんはチビリッ

サ河の向う側、マリリア郡内の土地へ棉作りに移られました。この土地は阿部さんの隣りで鳥取県人の木町さんという方の土地で、上塚周平さんの下働らきをされていた鳥取県人の山根寛一氏が売出された処でした。阿部耕地へは、鳥取県人の長田さん、宮城県人の佐藤始氏の弟、五男氏が入って来られました。

昭和八年、橋本のおじさんの居られるアンデス植民地内で、山本作次郎氏との境の五アルケールを買わないかとの誘いで父も買うことに決めました。五アルケールのうち半アルケール程は既に拓けていて、入植する迄に休みの日を利用して通って、マンジオカでも植えて置きなさい、と阿部さんが云って下さるので、土曜、日曜にかけて、みかんの苗やマンガの苗のラッチンニャに植えたのを担ぎ、コラソン区を出てチビリッサ河で一休み、アンデスの橋本おじの家へ昼頃着き、夕方まで働らいて小屋で一泊、翌日また半日働らいて帰るというふうにしました。

母は父や小生らに気を使って、貧しい食卓にも、いつも庭の花を切って来て活けてありました。疲れた夜などは日本から持ってきた児童文庫を読んでくれたりお伽話を聞かせてくれたりしたものでした。五月に妹が生れ千恵子と命名されましたが、今度こそ育てなければというので、迷信でしょうが橋本のおじさんが、一日捨てて拾えば育つといわれるのに従いました。この妹が今健在でいます。

六月の火祭の翌日、コーヒー園からの帰途、手製の鉄砲で鳩を射とうとして、散弾は先に飛んだのですが火薬の灰が目に刺さり、

両眼とも霞んで見えなくなってしまいました。佐藤さんのご姉妹に連れられて帰りましたが、両親は盲になったと慌ててておろおろしてしまいました。その時、隣りの安田耕地に居られた佐藤武士という方が駈けつけて下さいました。この方は、熊本出身で柔道三段、砲兵隊にいっておられて、火薬の怪我は油薬を塗って置けば自然に浮き出て抜けるものだと教えて下さいました。翌朝はグロリア区の松谷さんにも相談して油薬を買い、十日程で殆んど抜けましたが瞳の近くに刺ったのが抜けるまでうずいたものです。その後、視力も弱り、三年ぐらい黒眼鏡を掛け続けました。

独立農に入る、棉作り

九月末、三年間お世話になった阿部耕地からアンデス植民地へ独立農として入植しましたが、阿部耕主もよく働らいて貰ったから、移転二回の車代金は支払わなくてもよいと云われ、感謝の御礼をのべてお別れしました。この年は上場第二植民地の十周年祭で、汎ゴヤンベ大運動会が催され、移転前のことで母と共に見物に出掛けましたが、街路で向うから来られた小柄な方と挨拶をしてすれ違いました。運動会の時に祝辞を述べられた方がさっき出会った上塚周平翁と分ったものでしたが入植して当分は、橋本おじの小屋を借りて荷物の間に挟って寝起きをしました。

山焼きの跡片付けで焼け残りの枝を切り落し集めては燃やすのですが、中々燃えないで困っているところを、山本作次郎さんか

ら要領を教えられて、大いに助かりました。

千古の原始林を切り拓いての棉の蒔付けは、縦横に根が張っていて、穴を掘る巾の狭いくわも入らず手間が掛りました。密林際に蒔いたトーモロコシは採取前に殆んど猪に食い荒らされてしまいました。タマンドアという赤蟻を常食としている獣を、後ろから父が脳天へ斧を打込んで獲って来ました。この獣は立てば一米以上の丈で腕節が強く、抱えられたが最後、引裂かれるということで、丁度チョッキを着たような模様です。これを明朝皮を剥くつもりでその夜、樽に入れて蓋をして置きました。さて翌朝蓋を取ったところニュツと立ち上ったのには驚ろいたものです。

昭和九年に入り、江原岩造さんに来て貰って家建て井戸を掘りましたが、それ迄の三ケ月間、雨水を溜めたり、三百米程の隣の山本さんから井戸水を貰いに行ったものです。井戸掘りといっても井戸掘人夫は仕事が多くて引っ張りだこ、何日になることやら分らないので、自分らで掘ることにしました。近所の本尾利明さんが一週間程井戸掘りに来て下さったので、方法も覚え六米ぐらいから先は父と小生と替わりがわり掘り込んでいきました。三十米近くなって昼休み後、父が入って三分も経たぬうちに、苦しいから巻き上げてくれと叫びます。慌てて巻き上げましたが、ガスが湧いていたのです。以後、濡れたドンゴロスを上から降して、上の空気を入れ、ガスを抜くようにして、遅々として掘り進み、十日後にやっと水に到達しました。

棉の収穫までに、米の外にマンジオカ芋が大きい助けとなりま

した。六月中には棉の収穫も終り、父の仲介で小谷家の次女春枝さんと本尾利明さんの結婚、続いて山本作次郎さんの一人息子、正作さんと本尾春栄さんとの結婚式が挙げられました。

寺小屋式のアンデスの学校で大家義彦先生に教えて頂きました。小生は三ケ月程でしたが弟が習いました。この先生は鳥取県で校長を永年勤められたのだそうですが、引退され、その後、深井先生、この方も昭和十年一日に引退され、日本大学文理科卒の阿部太先生を迎えました。

阿部先生になってから、生徒四十名に、日記をつける習慣を強調されました。当時既に一年前から小生は日記を書き続けて居りました。

ペンナポリス・アバニャンダーバ滝見物。後、記念写真
後列左より、三宮君、寺岡君、大家君、児玉君。
前列、橋本君、小生、井田君、安田君。

十二月二十五日、弟、外記三生れる。夕方になって三才の妹をおんぶして、子守唄を唄いながら隣との境界線まで往き来する間に寝入り、床に寝かせたのもこの頃のことでした。

昭和十一年、学校では小生、年長であるため、一年の間に三年生から六年生の読本を読めるだけ進めて下さり、素通りの形で卒業したことになりました。一月末頃になると、棉も一米以上に伸び、害虫が発生、当時の棉作黄金時代で農薬の不足から、青粉を混ぜた不良品が出まわり、大変な損害を受けたものです。パナイ区に居られた湯谷さんという父の知人から縄煙草の不良品を分けて貰い消毒に使ったのもこの頃です。噴霧器破損して、ゴヤンベ迄持って行かなければならず学校が済んでから二時頃、小雨の中を噴霧器を背負うて出掛けましたが、二十五キロのうち十キロは密林です。雨期は殆んど通る人もなく、道には雑木が生え、豹や猪の群が現われたもので、ステッキで打払いながら軍歌をうたい、足早やに進みました。途中、一軒山小屋があって、お前これから山を抜けるのには豹に食われてしまうぞ、と脅かされたものでした。チビリッサ河を渡る頃には殆んど昏れかけていて、河から三キロ程行くと密林が終り、ドトール・カルロスの耕地でコロニアが二十軒ほど建っていました。ここから二キロ程でグロリア区の山口正司さんの家に着きましたが突然のことで、おばさんもびっくりされ、一人で歩かせたといって後日、父を責めておられたものです。もう脛がくたくたに疲れていました。

開拓当時、橋本のおじさんが、カービン銃で二百キロもある夢

食い獣を射ち八人がかりで道まで運び出したことや、本尾利明さんが夜中に密林を抜けることになり、前方から人のように立って歩いて来るのが月明りで見えたので木の蔭に隠れて行き過させたところ、一米あまりもあるタマンドアで、うしろから杖で殴り込んだ。なんとも云えぬ悲鳴で、連れを呼んでいるのではと恐ろしくなったそうです。それでも四脚を縛ってゴヤンベまで担いで帰ったということでした。又、或る時は、椰子を割って並べた寝床の下に麦藁帽が転がっているぐらいに思って寝たのですが、朝になってよく見ると、なんとそれが鈴蛇のとぐろを巻いたのでした。一晩中、毒蛇の上で寝たことであったと話されておりました。

棉の収穫期になると、昼は棉摘み、夜は棉詰めで、大変な労働を必要としたものです。棉九百アローバ、米七十俵の収穫で、余財はリンスの東山銀行へ預金しに行ったものです。

寺小屋の校舎は大家直さんの土地を一アルケール提供され、村人の寄付と、日本政府からの援助金も受けて、昭和十一年に着工、十二生九月七日に新校舎落するということで・丁度チョッキを着たような模様です。これを明朝皮を剥くつもりでその夜、樽に入れて蓋をして置きました。さて翌朝蓋を取ったところニュッと立ち上ったのには驚ろいたものです。

昭和九年に入り、江原岩造さんに来て貰って家建て井戸を掘りましたが、それ迄の三ケ月間、雨水を溜めたり、三百米程の隣の山本さんから井戸水を貰いに行ったものです。井戸掘りといっても井戸掘人夫は仕事が多くて引っ張りだこ、何日になることやら

分らないので、自分らで掘ることにしました。近所の本尾利明さんが一週間程井戸掘りに来て下さったので、方法も覚え六米ぐらいから先は父と小生と替わりがわり掘り込んでいきました。三十米近くなって昼休み後、父が入って三分も経たぬうちに、苦しいから巻き上げてくれと叫びます。慌てて巻き上げましたが、ガスが湧いていたのです。以後、濡れたドンゴロスを上から降して、上の空気を入れ、ガスを抜くようにして、遅々として掘り進み、十日後にやっと水に到達しました。

棉の収穫までに、米の外にマンジオカ芋が大きい助けとなりました。六月中には棉の収穫も終り、父の仲介で小谷家の次女春枝さんと本尾利明さんの結婚、続いて山本作次郎さんの一人息子、正作さんと本尾春栄さんとの結婚式が挙げられました。

寺小屋式のアンデスの学校で大家義彦先生に教えて頂きました。小生は三ケ月程でしたが弟が習いました。この先生は鳥取県で校長を永年勤められたのだそうですが、引退され、その後、深井先生、この方も昭和十年一日に引退され、日本大学文理科卒の阿部太先生を迎えました。

阿部先生になってから、生徒四十名に、日記をつける習慣を強調されました。当時既に一年前から小生は日記を書き続けて居りました。

十二月二十五日、弟、外記三生れる。夕方になって三才の妹をおんぶして、子守唄を唄いながら隣との境界線まで往き来する間に寝入り、床に寝かせたのもこの頃のことでした。

昭和十一年、学校では小生、年長であるため、一年の間に三年生から六年生の読本を読めるだけ進めて下さり、素通りの形で卒業したことになりました。一月末頃になると、棉も一米以上に伸び、害虫が発生、当成祝賀大運動会が開催されました。九米に三十三米、ベランダ付きの立派な校舎で、マリリア郡内でも一番立派なものであると云われました。アンデス植民地の最盛期で、日系百家族、シネマの上映などもマリリア市よりも先に行われたものです。校舎の落成式を待たずに、その設計図を書かれた阿部先生はオウリンニョス市の教育普及会の舎監として転勤されました。阿部先生の時に〝青雲〟という月刊誌をすすめて下さり、テニスコートを作ったり、いろいろ文化面に尽されたものです。日本の万葉集に阿部青杜として短歌が載っているということでした。

青年会に入会、当時の会長は寺岡晃児君でした。アンデス小町と云われた安田久子さんが、棉畑の除草中に毒蛇に指をかまれ、マリリア市へ二ケ月ほど治療に難儀されたこともあります。

当時マリリア市には三十に余る製棉工場があり、日本からブラスコットが進出していました。郡内どこへ行っても棉畑で、棉の吹いた頃は真白く雪が降ったような風景でした。棉の都マリリアは郡内に三千家族の日系農家が住んでいるのだということでした。

昭和十二年七月七日、支那で慮溝橋事変が始まりました。従兄に当る本尾利明さんも既に一女があり、よく訪ねて来られましたが、自分も日本に在れば戦地へ送られるものをと話しておられました。

徴兵延期願提出、第一回国防献金のため青年団で共同作業、荒木帰一氏のコーヒー園除草に出動する。日本から鎌田博士が植民地の診療に来られる。母国への慰問品、募金に廻る。チビリッサ管内十ケ村の陸上大会に松原少年が三段跳びで邦人記録を樹立する。アンデスも参加して優勝、小生は八百米、千五百米に出場しました。

土地の木の根も少くなり、馬耕をするようになりました。同村の中村利三郎君の世話で、ノロエステ線カフェゾップ在の知那さんから栗毛の馬を買う。この時知那さん宅で食事の時間になり卓上に棒鱈と里いもの煮合わせたものを出されましたが、沖縄では普段お米は食べないのだとのことでした。笠戸丸組の方でありました。

本尾利明さんが不良な日雇人夫に裁鋏で腹を刺されマリリア病院に入院しましたが、一週間の後、腹膜炎を起して〝残念〟と壁に書き残して、あっけなく他界二十八才の若さで二人の幼女を残して去ったのでした。小生は常々、兄のように慕っていただけに、自分の兄が逝ったように感じました。利明さんは日本で習って来ていた金箔の飾り物の仕事をサンパウロでやりたいとの希望を抱いていた彼の心情を思うと、はらわたをちぎられるような気持になりました。翌年になってペニシリンが発明されましたが、もう一年これが早かったらと残念でなりませんでした。

同年十月末、故利明さんの未亡人の父・小谷芳蔵さんが、少し体の調子が悪いからといって、リンスの医者に診てもらいました

が、誤診でたった一本の注射により呆気なく他界、四十九才の若さでありました。翌日の葬式に行くための服を壁に掛けて置いて、山本正作さん家族が床に付かれたのですが、夜中に正作さんのお母さんが小用に出ようとして、炊事場に来られると、急にカンテラの灯が消えました。不思議に思い、正作さんの部屋の外壁から叩いて、いまお前は起きて炊事場に居たのかと尋ねると、いっていないということで、直ぐ起きて確めたところ、裏戸が開いていて、掛けて置いた服、時計、蓄音器のレコードなどが盗まれていることが分りました。まだ近くに盗人が居るのではと思い、空へ向けてピストルを三発放たれたそうです。早速当方へ知らせがあり、非常鐘を鳴らしました。村人たちは何ごとならんと集まりましたが、多勢の足跡で盗人の足跡を踏み消してしまいました。非常鐘は村の中央の高台に五米ほどの高さに半鐘が吊してありましたが、段々の横木が朽ちていて、ようやくに登ったものです。

次の日は丁度お盆の日で、川向うから墓参りに来る方が川迄来ると、二人の者が重い荷物を置いて川の水を飲んでいた、ということを、アンデスの端の方に住んでおられた辻さんから知らせがありました。荒木さんの自動車で村人がチビリッサから二人の警官も乗せて追跡しましたところ、二キロ米ぐらい走ったところで前方を逃げていく二人を発見しました。一人はコーヒー園へ入り込み、一人は密林へ入ろうとするのを警官が鉄砲で射ったのが両の足に命中、バタリと倒れました。盗まれた品物は見つかったものの、レコードは殆んど割れていました。マリリアの牢獄へ入れ

られたものです。

隣接地を買う、表土流失

小谷芳蔵さんのお葬式も済ませ、この年も慌しく過ぎ去りました。昭和十四年、馬一頭による耕作で大変能率が上り棉も普通に収穫を終えて、家族六人、全部整理すれば日本へ帰って暮せるであろうと一応の計画を立てたのでした。父は帰国のことがあまり気乗りしないようでしたが、この時、隣りの山本正作さんが、新らしく原始林開拓に移転されるにつき、そのあとの土地を買ってくれないかということです。父ももう一ふんばりするつもりで購入、日系の方に五ケ族入って貰って、二年契約の棉作りをして貰うことにして、馬七頭を支給して馬耕に取掛りました。九月から十月にかけての棉の蒔付け、雨の多い年でして十一月の末から棉の間引きに入る頃、雨で表土の流出が激しく、三十五アルケールの土地に股げないような溝が幾本も出来、大変なことになってしまいました。

十二月の末、植民地内で売店をして居られた渡辺さんが正月用品の仕入れにマリリアへ行き、自動車に品物を積込み、納見三千三さんご夫婦を乗せて帰られました。納兄さんはアンデスで歯医者をしていられ、結婚されて間もない方でした。店の近くまで帰ったとき大雨の中で道が滑べるので、渡辺さんが車を橋の上に止めて置いて、店まで三百米ぐらいの処を鍬を取りに戻られまし

た。橋のところへ戻って見ると橋もろとも車も納見さんも流されてしまって姿が見えません。さあ大変！！緊急、花火を打上げて村中へ報らせました。村人たちが集って来ましたが、夜に入って手のつけようがありません。翌朝になって見ると、二百米ほど下流に車の屋根だけ見えます。納兄さんは濁流に呑まれてしまったようです。ところがこの方は、胸元まで濁流につかりながら、妻と共に岸に辿りつき、岡の向うの平井さん方へ避難して居られたことが分り、一同安堵の胸をなでおろしました。

昭和十五年、棉は前年の半作以下で契約者も当方も大変な損失です。この状態では来年も期待出来ないから、契約者の方々に進退自由にして頂くように申し出でましたが、もう一年頑張ってみるということで踏止まって下さいました。棉の出来ないような所へは落花生豆を蒔いたりしましたが、やはり芳しくなく、契約の二年を終えて空しく出て行かれました。

青年期、養蚕

七月に青年会で、二泊の旅行に出ることになりました。新車を下したばかりの大家好さんの運転でアバニャンダーバの滝見物です。顔ぶれは、寺岡さん、井田さん、安田さん、橋本寿雄君、三ノ宮さん、児玉さんと小生の八人。リンスの先で小憩の時、三ノ宮君が乗り遅れて、二キロも行ってから気がつき、すたすたと

走ってくるのを待ったものです。その夜はペンナポリス泊り、翌朝、滝での釣りに、三ノ宮君が高圧線に触れて倒れたりしましたが、高圧線も弱かったのか命拾いをしました。三ミルで買ったバナナ・マッサンが八人で食べ切れなかったり、砂原で伯人美人と話ったり、なつかしく思い出します。

帰途はリンスで一泊。ムイトボン写真館で記念写真を撮りましたが、小生として青年期に入っての初めての楽しい団体旅行でした。

天災あとのアンデス植民地は、一人去り二人去りして淋しくなっていきました。お髭の佐々木さんが芝居の師匠になって慰安演芸会をしましたが、神崎与五郎東下りの場面で、佐々木さんが茶店の婆さん、小生が与五郎に扮したものです。

剣道部も組織され、川向うの伊藤早苗五段範士に指南を受けましたが、始め二十名もあったものが三年間で僅か六名残ったものです。

この年、従兄の中野栄次郎さんはマリリアから百キロも奥のリノポリスの原始林に、小谷芳蔵さんの遺家族を世話されていた江原岩造さん共々、移転して行かれました。故本尾利明さんの未亡人は、父の世話で、ベアードの岡山県人、石山順次さんと結婚、二人の連れ子も実父以上に可愛がられていたものです。

昭和十六年十二月八日、日米開戦。

青年会の改選で会長に選ばれたが、受ける自信もなので、先輩の渡辺公夫さんに相談してみたところ、誰も自信があって引受け

る者はないが、これも大切な人生修業の一つであるから、大いに頑張るべし、といわれて、その後曲りなりにも務めさせて貰ったものです。

九月に公栄植民地で汎マリリア農事講習会があり、アンデスから小生と大家義夫君、大沼功君の三名が参加、百五十名が一週間、同じ釜の飯を食って暮しました。産組中央会の堀清氏、コチアの下元健吉氏、養鶏指導の古田戸氏、コチア青年部の井上氏、領事館勧業部の北村豊次氏などが先生でした。メスキッタ植民地の浜田昌造氏よりムクナ豆三俵を得て流失地に蒔き土地の更生を図りました。

結婚、牧畜

昭和十七年、日本で養蚕経験のある安田さんが養蚕を始めて居られ、小生もすすめられて、半アルケール程、桑を植えました。七月二十五日、故小谷芳蔵氏の在世中に父と話がついていたそうで、小谷さんの四女隅代と結婚することになり、リノポリス迄迎えに行き小野栄次郎さんの仲人役でしたが、不作続きの情態を承知の上で嫁いで来てくれました。

疲れた土地にマモナが育つということで、十アルケール植えましたが、収穫が年中だらだらで難儀をしました。小谷家の方の仲人は故本尾利明さんのお隣りの青木宇平ご夫妻でした。当時、小

生は二十四才、隅代も同年で、弟は十六、妹は十一、下の弟が七つでした。隅代の母も結婚の前年に、洗濯場で指の先を少し傷ついたのが破傷風となり、呆気なく四十六才の若さで他界されていました。

試みに一、五アルケールのユーカリ林を植え込みましたが、よくサウーバ蟻に切られるのを父が見廻ってくれたものです。二年間休ませてあった処を一伯人に契約耕作させたが、作柄がよくて双方とも儲けたものです。安田さんのおばさんが養蚕はくわしい方で一週間習いに行きました。捨てると云われた三日目に発生の毛蚕を貰って育てましたが、まだ蚕室も無いので、物置場を片付けて使いました。黄色の支那種ということでした。雨期に入ってからの繭ちぎり、家族総がかりで、毛羽繰りが大変で、養蚕というのは大変な仕事だと思いました。あまりにも手間がかかるので父がチビリッサから毛羽繰機を買って来て、どうやら処理したものです。安田さんの繭と積み合わせて、マリリアのマタラーゾ製糸会社へ出荷、五十キロの繭で中古の馬車を買いなお少しお釣りが出たものです。

昭和十八年、どこの部落でも棉作に変って養蚕が盛んになり、大きな蚕室が建ちました。ポルトガル人の木挽きがいて用材を作るのでしたが、安田さんの次男国夫君が見習い、それを又小生が見習って、弟を相手に木挽仕事を致しました。

昭和十九年六月四日、長女多美子生れる。弟と共に四米に五十米の蚕室を建てました。屋根は茅葺きです。養蚕に入りましたが、

蚕種が間に合わず、不良種が出廻るようになり、上蔟近くなってからバタバタと死んでいくようになりました。小生もこれはウイルス菌によるものだと聞いていたので何とか早期発見は出来ないものかと考え、虫眼鏡を買って、初眼のときにくずついて、寝の揃わない蚕をよく見ると腹に黒点が出ていることに気づき、早期に埋めてしまうことにしました。こうして次々と毛蚕を育てて飼う中に、他の方々か腐らしてしまわられる時に、繭を取ると不思議とされたものです。平田は繭を取ったそうな、と皆が不思議がって見に来られたものです。

昭和二十年、この年の晩秋蚕に、手広く養蚕をされている井田さんに招かれ、彼が種付けをして取った種を小生外二人、各二百グラムづつ、試育してみないかと云うことになりました。

発生も順調で、初眠起きに虫眼鏡でしらべましても異状なく進みました。桑が落葉前で変色していて硬い葉で育てたのですが、調子よく育っていきました。五齢期に入り、蚕座が嵩高くなって、空気の通いが悪いようなので、この座の下に仰向けに入り込んで、座の茅の下から手を突込み蚕糞を掻き落してやりました。座の巾が三米、高さ五十センチ、長さ四十五米の所を夜の給桑のあと皆が寝静まってから始めたのですが、夜明け方まで掛りました。

このためであったのかどうか一匹の落伍もなく、かたい繭七百キロも採ることが出来ました。この収穫により、一年間の米を買い込み、二十アルケールの地権の切替費、初児の誕生の玩具など、

また牛四頭も購入牧畜を始める計画を立てたのもこの時でした。
ところが同時に飼育した他の二人は、一人は早く捨ててしまわれ、一人は半作であったとか、後日、平田には良い種をやったのだろうなどと云っておられたそうです。
昭和二十年七月四日、長男一彦生まれる。八月十五日終戦。日本が戦争に負けたとの知らせで、食べ物も咽喉に通らず、涙が流れて呆心の有様でした。以後、いろいろのデマニュースが流れて、惑わされることもありましたが、気を落付けて、たとえ在留邦人が日本へ引揚げるようなことになろうとも、その時までは、自分の仕事をおろそかにしてはならないという父の意見でした。日本が負けたなどとは思いたくないが、ブラジルに永住しなければならん時が来たのかと、半ばあきらめの心も湧いてきました。
養蚕業も取れたり取れなかったりの状態のなか、大家直さんのお世話でマリリアの農産物仲買商の川野年明さんと云う二世のお名前を借りて、カンピーナスの蚕種局の蚕種を飼う手続きをしました。部落内十家族ほどで、繭の出荷には、直径三十センチ、長さ一米半の竹かごを使うことになりました。籠の口に使う桟俵を父が上手に編んでくれたものです。カンピーナスへの出荷には、貨物列車で、バウルーで積み替えるのが日数がかかって蛾が出ていたこともありました。
農閑期の十月に十ケ族の出荷分の勘定を受取りに、大家直さんに連れられて、松原三郎さん、大家義夫さんと小生ら四人、カンピーナスへ向いました。カンピーナスの一つ手前、アメリカーナ

駅から発車して間もなく急停車、一伯人の飛込み自殺でした。胴中から二つに切断されていて、心臓がまだピクピク動いていました。カンピーナスに着いて長戸旅館に入り、朝食の時、誰も物が口に通らなかったものです。

蚕種局で勘定を受取りの時、どうしても九百ミル余分に支払われていまして、返すかどうかと相談しましたが、直さんの言われるのに、もし少かった場合でも何んとか言って支払ってくれるものでないから、貰っておけ、ということに決着、この余分の金でサンパウロ見物ということになり、小生が会計で、渡伯以来、始めてのサンパウロ行きでした。

サンパウロではジョン・メンデス広場のクリスタール・ホテル泊、その夜、直さんの案内で、先づグロリア街の料亭・黒猫に行きました。こんな席は始めての上に酒の飲めない小生らは、まるで借りて来た狆のような格好で女給さんは直さんだけを囲み、お大尽気取りなので、こちらは面白くありません。ここを出て、ダンスホールで滝谷寅太郎さんと出会う打合わせをして、ダンス・ホールへ行きました。ここでも滝谷さんだけが美人ダンサーと踊るのみ、四人はただ、それを眺めているだけでした。次にサンパウロで一番の高層マルチネリ・ビルの二十七階、屋上から夜の大都を眺めました。大家義夫さんが屋上の理髪店で髭を剃らしたところ、五ミルも取られました。夜中を過ぎてホテルへ帰りました。

翌日、イピランガの独立像、博物館を見、アラサ墓地で去年、亡くなられた山根寛一さんの墓参、この日は丁度お盆の日でしたか

ら、大変な人出でした。この頃、山口正司君はサンパウロに来て居られ従姉の山口良子さんの嫁がれた沖田さんが、エスツダンテス街に住んでおられたので四人連れで訪問しました。沖田さんは東山の織物部に勤めておられて、近く結婚される直さんの弟の好さんのために、羽二重など買われたものです。カンピーナス迄の切符代を支払って、預り金を使い果したものです。

昭和二十一年八月十五日、マリリアから二百キロ奥のイヌビア在の小谷家へ里帰えりのつもりで二人の幼児を連れて家内と出掛け、トッパンからイヌビア行きの乗替バスに乗り遅れて、一泊することになりました。古本ホテルで食事中、急に外が騒がしくなりました。屋根伝いに逃げて行く日本人を警官が追うていて勝組負組の争いの最中なのでした。この時、側杖を食ってホテルに居た男衆は、みな牢獄へ入れられました。三米平方の所へ罪人が三人入れられていた中で五十人からの日本人が詰め込まれて、ひどい目に会いました。後、兵舎に送られましたが、ここでは南京虫に苦しめられました。ようやく十日のちマリリアへ帰りました。扱いにくい日本人達だと警官たちは思い、日本人を全部去勢してしまえ、などと、いわれていたそうです。当時、日本人が集まれるのは野球だけで、全伯的に野球が盛んになりました。父は野球は自分では投げないものの球場を提供して、弟はフアスト、小生はライトでチームに加わり、正月休みは三日間のリーグ戦を行い、十一ケ村で一千五百人の見物人を集めたこともありました。三連勝して永久獲得のカップを現在も保管しています。

昭和二十二年一月十日、次女明子生まれる。アンデス区から十六キロ程の河へ青年男女子供たちピクニックの時、橋の上で皆が弁当の最中に、河上で進ちゃんが溺れると安田清君が叫び出したので、橋から見ると浮き沈みして流されて来るのが見えます。早速一同河の中に横並びして、手をつなぎ合わせ誰かに触れた時、つかまえる手配をしていましたら、真近く浮き上ったのを安藤猛君が助けあげました。水を吐かせるやら大変な苦しみようで、そこそこにして引揚げました。

日本から戦後、始めての手紙が届き、戦時中に宮崎のおばあさん、石川県のおばあさん、宮崎家を継ぐ作土おじさん、日野家へ嫁いでいた寿恵子おばさんが他界されていて、母の落胆は哀れなものでした。以後、日本へ帰ることを忘れてしまったようでした。

昭和二十三年四月二十日、三女佳代子生まる。隣りのお髭の佐々木広友さんが中熊番茶の師事を受けて俳句を始められ小生へもすすめられたので、始めて投句してみましたが、番茶選に入った句で、

〃ふしくれのころげる蒔を火祭りに〃

安藤大工さんに頼んでいた仏壇が出来たので、日本の他界された方を過去帳に書いて、朝夕、お参りすることにしました。父が村の青年と相撲をとって、肋骨を傷め病み出す。弟が野球で、ランナーの滑り込みの際、スパイクで鼻を蹴られ怪我をしていたのをサンパウロの木原暢医師の整形科で治癒する。

昭和二十四年十一月三十日、次男啓二生まる。弟良二の治療で

サンパウロのクリスタール・ホテルに投宿中、安田家の末息子さんで同じホテルに泊って仕事をしながら飛行学校へ入学の希望で、書類に母親の署名をするよう頼んでくれないかとの依頼です。（父親は故人になっていた。）弁次君が飛行学校へ入りたいのだと云えば、真向から反対されるのは分っています。昨年弁次君がマリリアの自動車修繕工見習いの時、主人の永井さんが、アエロ・タクシーをやっていて、パラナ空港離陸の際、発火して焼死していたからです。そこで弁次君の母親に、ただ学校へ入るための署名だと云って署名して貰いました。

其の後、弁次君は日系第一号パイロットとなり、ガイゼル大統領訪日の際の大役を全うしました。

昭和二十六年八月四日、三男孝三生まる。弟外紀三マリリア中学へ入学、寄宿舎へ入る。川向うの土地四十八ヘクタール購入。牛四頭によって耕やし、九月から十月、落花生豆を蒔きました。笹崎製の種蒔機で蒔いた後は腰に引摺っている鎖で塞ぐようにしました。

父・転地療養、土地拡張

マリリアの柴崎医師の診察の結果、父が転地療養となり、母の付添いで、カンポス・ド・ジョルドン高原の療養生活に入る。書き遅れましたが、昨年、戦後始めてのスポーツ使節として水泳の遊佐監督、古橋選手ら一行がマリリアに来られ、四百米世界記録

を出しましたが、その力泳ぶりを目の当りにして感激したものです。続いて芸能団も来伯しましたが、当時は弟妹と共に働らき虫になっていました。妻も子育てから遠い畠への弁当運び、三十米の深井戸の水汲み、大変な忙がしさでしたが、何一つ不平顔を見せず頑張ってくれたものです。

この年の落花生豆は七十俵蒔いて二千五百俵、好収穫でして土地代金が支払えました。

昭和二十七年、四女陽子生まる。四月から九月まで弟と木挽きをして建築材料を作り、板だけは購入しましたが、小生の設計で安藤大工さんを頼んで本建築をしました。飛行機の形の間取りで、玄関の方が父母の部屋と応接間、続いて六つの部屋、裏の方に食堂と炊事場、長いベランダを付けましたが、人さまは旅館のようだと云われたものです。

弟の結婚、養蚕移民受入

弟良二の結婚、小笠原氏の次女、登美子さんを迎える。もと中野栄次郎さんの土地を一伯人が買っていましたが、麻を植えたり、養蚕をして荒らし放題になっていました。その土地を買って弟の独立、百米巾に三キロもの長い土地でした。小生と弟、使用人三人で十一月から開き始め、養蚕を始めることになりました。七米に五十米の古い蚕室の修理と、別に四米に五十米の蚕室を建てましたが、数年前に植えたユーカリ材が随分役に立ちました。北米

製のアリスシャメル印の耕転を購入して、材料の運搬に使いました。

その頃、チビリッサ町の山本繁夫さんが、養蚕を手広くされていて、良い蚕種を手に入れたから、試育して見ないかとすすめられて飼育、一千キロも繭を収り続けて三回も飼ったものです。

昭型一十八年六月二十八日、五女須江子生まる。父が手術後、カンポスから帰り、家で養生、牛も殖えて百頭近くになりました。毎朝二十頭の乳を搾り、乳製品を作りました。妻がケージョやレケージョンを作り子供らもふんだんに食べて育ちました。十月二十三日次女が狂犬に噛まれ、臍の周りに二十本もの皮下注射をしました。

生糸業者と養蚕家と合同で、全伯養蚕協会が設立されました。理事長が産組中央会のドトール・ピーザ氏副理事長がチビリッサの山本繁夫氏、常務が堀清氏第一書記がリンスのジョン・ベント氏、監事にブラ拓の天野覧児氏、崎田春夫氏、バウルーの阿部二郎氏、ガルサの小川嘉明氏と錚々たる顔ぶれ、マリリア近辺の養蚕家の選挙で小生が支部長となり、以後、十余年勤める。

十月、マリリアから蚕種を持って、バスで帰る途中昭和植民地の長瀬耕地へ来たところ、台風で一と抱えもの大ユーカリが倒れていましたが、帰って見ると、弟の方の七米に五十米の蚕室の屋根が、持ち上げて横に置いた形で吹き飛ばされていました。九人がかりで一週間で元通りにしましたが、忙がしい目に合ったものです。

昭和二十九年八月二十四日、ゼツリオ・バルガス大統領逝く。

石川県の松任町で呉服屋をしておちれた平源兵衛さんが、橋本おじを頼って来られ、配耕地へ入らないで直接、アンデスの原始林に入られました。以後、母親が逝き、妻が逝き、一人息子の源さんの妻も他界され、二人の孫のうち一人はマリリアの鉄工所見習いに出て、六才の孫と二人暮しでした。源さんは折紙手芸の講師で地方を廻っていて不在勝ちでした。お昼頃になると当家を当てにして来られ、足の指に入った砂蚤を、妻に頼んで堀って貰っていました。妻も大きな腹を抱えながら嫌な顔もせず、お爺さんの十本の足指をたんねんに見てあげていました。堀ったあとにヨードチンキを塗って貰って喜んで帰って行かれたものでしたが、哀れな晩年を送られたものです。

昭和三十一年一月四日、四男義雄生まる。養蚕協会を通して、戦後、始めての養蚕移民が四十家族が渡伯うち一家族を当方で受入れました。宮城県出身の丹羽さんという方で四人家族、満州で開拓八年の経験ということでした。サントス港まで出迎えに行きましたが新造船ブラジル丸でした。戦後、始めての移民ということで、マリリアの有志たちがマリリア駅へ出迎えて下さったものです。

タクシーで早速アンデスに向いました。家に着くなり、丹羽さんの奥さんが、ブラジルにはピンガという酒があるそうだがと催促されるので出しますと、奥さんだけがカリスで三杯も立て続けに飲まれました。父も今度来られた人は、えらい人やなアと呆れ

ていたものです。

弟の方に住むことにして翌朝、荷物も運びましたが二日目には一人の息子と喧嘩が始まり、その息子さんは本家で泊らせることにして、弟の方へ働らきに行くことにしました。丹羽さんの話では、一終戦して満州から引揚げるとき、本妻はパラチブスで亡くなり、日本へ帰って後添えを迎えられたとのこと。娘さんとは仲良いようでしたが、息子さんと旨くいかなかったのでしょう。一週間後、夫婦してバストスへ視察に行くと云って出られましたが、二日後に帰られての話に、バストスに入られた四力族に比べ、大変良くして貰っているから頑張ります。ということでしたが、半年後には、ボツポランガの方へ移って行かれました。

丹羽さんから聞いた満州での八年間の体験談を綴って置きます。日本から満州に開拓に入ったというのは名ばかりで、実は満人の住み付いていたのを武力で追い払って、彼らの家を改築して住んだのです。夏季に草を干して置き土饅頭型の二重壁の間にこの草を燃やして暖をとり半年の冬ごもり、穴倉暮しをするのだそうです。地味が良く作物もよく出来たとのこと。広い満州のこととて戦時下にも、戦斗機一台も通らなかったと云うことです。いよいよ日本が負けた、との知らせで守備していた隊長が、今夜身柄一つで此所を去らねばならないと言い渡し、その夜、部隊長に従って一同住家を去りました。一と山越えた所で後方に喚声が上り住み家に火を放たれていたとのこと。こうして昼は、こうりゃん畑に隠れて、夜歩き落ちのびたのだとのこと。クリークに幼児が死

んで捨てられ、浮いていたとのこと。彼の妻子もパラチブスで哀れ死に捨て。途中、どうしても満人部落を通らなければならん時は隊長が抜刀して切り抜けたのだそうです。こうして奉天へ辿り着き、引揚船を待って辛うじて日本へ帰ったという体験談でした。

ブラジルに於ける開拓とは比べものにならないもの　ですか、若し武力を背景としないで、平和的に法に従って満州へ入植していたら、ブラジル移民の何倍ものものが送れたのであろうから、日満双方ともに繁栄したのであろうと、日本外交の失敗を痛感するものであります。

日本から派遣されていた福岡県の蚕種技師、古川さんがカンピーナス蚕種局で客死、一過忌のミサに伊藤領事を始め、天野覧児氏、堀清氏、山本繁夫氏、阿部二郎氏と共に参列。

昭和三十二年、鳩山内閣のあと石橋内閣となり、三年続きの米の豊作のニュース入る。

同年十月九日、六女ゑみ生まる。昭和三十三年五月二十三日、日本の日野幸三郎おじ死去の知らせ、六月十二日、橋本清二おじも膵臓癌で半年患って他界される。日本移民五十年祭の年で三笠宮殿下がマリリアへも来られ、市庁舎前庭にイッペ樹のお手植えをされました。

妹の結婚・父の死

昭和三十四年一月十八日、リノポリス在であった小野栄次郎さ

んが亡くなられると、父は今度は自分の番だと気弱なことを云うようになりました。小野栄次郎さんは、父と一つ違いの甥でしたが、ゴヤンベ寺院にお廚子を献建されていましたが、これが栄次郎さんの形見となりました。

石川県から西外居氏が、能登半島の水力ダム建設による二十家族ぐらいの移住先を探しに来られたということでした。四月十日は皇太子殿下のご成婚式で、餅を搗いて祝いました。丁度、この日、隣の橋本さんが養鶏のトウモロコシを脱皮する機械のベルトの締め加減について、父の経験からいろいろと指図していたのです。その夜、寝静ってから、母が小生らを起しにきて、父の様子がおかしいと云われる。すぐ行って見ると、父は、医者が五年は保証するといった命が、牛乳をふんだんに飲んだせいか十年も生きた。しかし、いよいよ終りが近づいたと思うので末の外妃三を頼むと云われる。そんな気弱わでどうする、しっかりするよう力付けましたが、夜明けを待ってマリリアの柴崎ドトールに容体を話し、薬局で薬を買っているときでした。昨日、トウモロコシの脱皮をしていた従弟が来て、顔を見るなり駄目だったと云う。何が駄目だったと聞き返すと、武ちゃんのお父さんが亡くなったのだと、その知らせに小生の後を追って来て下さったのでした。早速、各地へ死亡の知らせをいたしました。

六十四才の若さでした。元来、丈夫な体質でしたが酒の過ぎたのが五十代に入って障ったようでした。弱い弱いと云われた母が、幼少の頃から、ものをよく噛んで食べるように教えられていて、

食事が遅いと、よく父から詰られていましたが、やはり永生きをすることになりました。

昭和三十四年十月三十一日、五男桂郷生まる。十一月に入って、アンデス植民地の大半を買い占めていたイタリア系のリオカルチポロンが小生に土地を買わないかとの話。西外居氏のことを思い出し、日本からの移住者を迎えたら良かろうと考えました。そこで趣意書二通に土地の略図を添え、マリリアに住む従弟の橋本政敏氏と木工所経営の堀善太郎氏の署名を貰い石川県知事、中西陽一氏宛飛行便で送る一方、リオカルチ氏には翌年一月三十一日迄待って貰うよう手配しました。この件が成功すれば、その頃、二十力族程に減っていたアンデスも二十家族の新来移住者を迎えて再び、返り咲くと夢見て、日本からの返信を待ちました。

十月二十六日、弟、リンス歯科医大入学。昭和三十六年一月三十一日ぎりぎりで、県知事直筆で県に予算がないから在伯石川県人会の力によって出来得るまで立替えを乞う、という返信にがっかりしたものです。

四月三日六男、武津雄生れる。サンパウロ市ピネイロス区の岸本昂一氏経営の暁星学園へ長女多美子が習っていて、マリリア方面へ〝曠野の〟の記事の取材に来られました。当方へも泊っていただいたこともあるので、此の辺の事情風土はよく知って居られたのです。コチア移民としてイビウーナに受け入れられた新潟県人の伊藤民雄さんが、ブラジルというのは広々とした所と思って来たのに、イビウーナは谷々の霞の深い所なので、ホーム

シックに掛っていました。同郷の先輩、岸本さんに相談された所、マリリアの中平さんか平田さんが良かろうというので、二通の紹介状を持って尋ねて来られました。

前年の養蚕移民でこりていたので、雑役として働いて貰うことにしました。この人は新発田農校を卒業、柔道初段、以後三年間、小生をパパイ、パパイと呼び右腕となって働いて下さいました。

弟がここの十アルケールの土地を売って、その代金に追金をして、プロミッソンの土地、三十五アルケールを買って移転しました。この土地はリンスで生糸工場主であるジョン・ベント氏のお世話によるもので、プロミッソンのポンスセッソの彼の所有地の隣接地でした。

昭和三十八年、七女、順子生れる。プロミッソンに移った弟から、近所でマンジョカ製粉工場をやっていて、大変合理的経営をしているというので、見学に行きました。古い土地にサンタ・カターナ種の芋を植えて立派にやっていました。早速、実行に移すことを決心しました。植民地に電気も入り、農産加工には恩典もありました。百頭近い牛を売却、更にブラジル銀行の融資を得て始めました。十五キロ離れた所にサンタカタリーナ種の芋を見付け、時価の倍額を払って、苗を入手しました。

九月末に工場を建て、リメーラのダンドレア農機工場から機械を購入しました。母が金銀の紙で千羽鶴を折って小生の完成を祈ってくれましたが、工場の完成間際に千羽に到達しました。

弟、歯科卒業、製粉業

同年十一月、弟、リンス歯大卒。後しばらくチビリッサ町で開業、同町の公証役人と協力して元野球場であった処に校舎を建て、初等科の学校が出来ました。マリリアから先生が教えに来て下さり、子供たちは、チビリッサ迄往復八キロの道を通わないで済むようになりました。四十名近い生徒が、昼食時に工場に来て煎餅のような熱々のマンジョカ製粉を食べていました。五月九日の大雨で、蒲原が流されて、二アルケール程の自然の池が出来ました。後には小魚が殖え、三キロものクリンバタが居たり、小舟を造り、舟遊びや釣を楽しませてくれました。

五アルケールに植えたマンジョカをもとに翌年には二十アルケールに増やし、近所の人達にも苗を無料で分ける。九月から十二月迄の木の芽どきには澱粉が少ないので製粉を休みますが、九カ月間は芽さえあれば工場を続けました。マンジョカ芋は掘ってから三日と保たないものですから、急に外部から入荷することもあり、昼夜釜を休ませず、伯人の使用人の外にも子供たちも、殊に伊藤民雄氏は頑張って下さいました。九月中に植え込むと収量が多いので仕事の捗るように工夫、七人で苗を切るのを二人で植え、一日に二アルケール宛植えることに成功しました。又、掘り起しは、セッカ期に入って、土が固いので、骨の折れる仕事ですが、鍛冶屋に大型の抜根刃を造らせて、難なく抜けるようにしま

した。この工場のために周辺の土地の値上がりをみたものです。
大量の製品を捌くためにコチア産組に委託販売で毎週カミニョンでサンパウロへ運びました。五、六月の寒い頃、暗いうちにジャグワレ倉庫に着き、倉庫の開くまで毛布にくるまって、待ったこともありました。当時、寺岡晃児君が信用部長を勤めて居られて、何かと便宜を計って下さいました。
伊藤民雄君が寒い地方で育ったから、熱い地方で暮したいと云って、岸本昂一氏と小生との紹介状を持って、パラー州トメアスーの重鎮、平賀練吉氏の養子に迎えられました。サンパウロ空港で別れるとき、吾が子と別れるような淋しさを覚えたものです。
プロミッソンに移っていた弟の妻が胆のう炎の手術をして、農業が出来なくなり、アララクワラ線サンタフェー・ド・スール市内の精米所を買うことに決めたと告げに来ました。この地方は米の産地で大小、三十軒からの精米所がありました。父が精米所で躓いた経験があるのに、ブラジルへ来てまで精米所をやるとは何の因縁かと思いましたが、やる以上は兎に角頑張るよう、すすめました。
昭和四十年、リンス市は学生の町と云われる程でしたが、子供達の通学のために、リンスから六キロのガイサラ町に家付きのシャカラを買い、六、七人住まわせることにしました。
八月一日、昼頃、高級車で二十年近くも会っていなかった大家好君の来訪です。アンデス出身の成功者ですが、彼のソーグラ、山根寛一氏の未亡人と四人の子供さん連れ、久しぶりのことで懐

しく思いました。小生は子供を育てるのに精いっぱいの時で、財的には君に負けたが、子供を育てた点では勝ったなアなどと笑い交し、再会を約して帰って行かれました。

昭和植民地の大地主長瀬　明氏も訪ねて来られて、サント・アマーロの所有地に池を造りたいがどのように造ったら良いだろうかとの相談でした。

昭和四十一年、農産加工品の流通税が四・四パーセントから一度に十八・六パーセントに上昇、大変な痛手を受けることになる。当時、マリリアにて催された農産展に出席された農務長官始め政府高官に流通税を下げて貰うよう陳情しましたが、何らの返答もなく、各地の製粉工場は軒並み倒産してしまいました。

昭和四十二年五月二十五日、サンパウロのパカエンブー競技場で行われた皇太子殿下ご夫妻の歓迎会に、七万人からの邦人が集まりましたが、小生も妻と参列五女、須江子がコーラスに加わていました。歓迎委員長は宮坂国人氏でした。

リンス市の生糸業者ジョン・ベント氏の耕地に、二十家族余りの日伯人養蚕家がありましたが、ガイサーラの山田麻雄氏の蚕種で成績が悪く、指導を頼まれたので、一カ月余り出張しました。夏の暑い最中で、稚蚕室が四十度にもなっているので、先づ瓦屋根に草を刈って被せ、地面には絶えず水を撒いて三十度に保ち大半の方がネアンチーナを使用して居られたのを、全部穴に埋めて使わぬようにしました。フォルマリンだけを使用、嬰を育てるように稚蚕の間は夜中にも給桑することをすすめました。又、小生が

泊っている別室に三キログラムの蚕種を発生させて飼育、初眠起きに皆さんに配って飼って貰いましたら、甞っては捨てていた蚕が八割方収繭量があって皆様に大変喜ばれました。

この時にフォルマリンで咽喉を痛め、喘息のようになりました。谷垣ドトール、細江ドトール、中平ドトールに診て貰いました。中平ドトールは咽喉のタダレだけだから治療すれば良くなる。どこにも異状はないあなたの命は百才まで保証しますよと云って下さいました。細江ドトールは海岸地方で十日も過ぎれば薬は服まなくても良くなると申され六女を連れてカラガタツーバの近くのマルチンデッサ入江の山内次三郎氏方にお世話になりました。この方が丸木舟で宵に網をったのを翌朝老夫婦で魚をとって来られるので、その新らしい魚を毎日ご馳走になるうち、四十六キロまで減っていた体重がもとの五十三キロに戻り、元気になって戻ったことです。

昭和四十三年の十二月に、岸本昂一氏の「眩野の星」に載っていたパラグアイ国を視察しようと思い、岸本氏に話しますと、アスンソン在の笠松省一氏へ紹介状を書いて下さいました。サンパウロを夜中に発車、南パラナを通り、イガラパーバで朝食、小さいながら清潔な町でした。聞けば市長さんは独乙系ということでした。カスカベール市は、開けつつある町で、周辺がテーラ・ロッシャの肥沃地ですから、将来伸びる所だと感じました。夕方イグアスー町に着き一泊ですが、ホテルで相部屋になった方が合気道の達人で、軍人などに指南され、これからアルゼンチンへ渡り、南

米諸国を指南して廻り二、三年後に日本へ帰るのだということで、珍らしい方と語り合えたものです。翌朝はメルセーデス・ベンツの小型車のバスで国境の友情の橋を渡り、七〇キロ程のイグアスー事業団の二万アルケールの土地に着きました。ここで民宿することになりましたが、この辺は大樹の間に高さ三米ぐらいのウルチーガが密生していて、如何に土地が良いかを知った訳です。そこここに支那桐が植えてありました。

翌日、事業団のジープがアスンソンへ行くのに便乗しました。アスンソンまで二百六十キロ、そのうち、八十キロはテーラ・ロッシャ、次の八〇キロはアレノーゾ、その次は湿地帯のパンタナール、その先がにょきにょきと五十米から百米の高さの奇岩地帯を縫って首都アスンソンに着きました。四つ角にも殆んどシグナルは見当らずお互いにブジーナしながら注意して通過していました。電力の節約とのこと、実にのどかな感じでした。明治、大正、昭和と混ぜ合わせた感じで世界中の車が走っていて、まるで車の展覧会の有様でした。ホテルから電話で先づ笠松氏をお尋ねしたら、ご婦人が電話口へ出られ、主人はつい先刻、公用のために飛行機で出掛けられた由、自分で良かったら用件をお聞きしましょう、とのことでしたが、ご本人でなくてはと思い、後日を約して電話を切りました。笠松さんは、日本から古い軍艦を二隻、パラグアイ国へ売込みの世話をされ、大統領官邸に何時でも自由に出入りを許されておられるのだそうです。

アスンソン港に行って見ましたが、一万屯級の汽船が三艘入っ

ていました。増水期には上流のコルンバ迄上るとのことでした。パラグアイの日系人は七百家族ぐらいといわれ、第二次大戦中は、中立を守り続け、日本語は自由であり、二世の方の日本語会話は日本に居るように流暢で頼母しく感じました。市中は小商人は殆んどトルコ系のようで、新来の他国者だと見て、袖を引いて店へ誘い込むのでした。翌日、また事業団のジープがイグアスーへ帰るのに便乗して出掛けました。途中のレストランテで夕食の時、一見して独乙人らしい大きな若者が寄って来て、事業団の二世の若者とカステリアーノ語で話し合っていました。この若者はもとヒットラーユーゲントの訓練を受けたもので、パラグアイで大牧場を経営しているが、パラグアイ人との軋轢はなく、むしろ独乙人との間で有ったとのことでした。

その夜も民宿して翌朝のことです。この事業団団地に住む日系の中年のご婦人が裏庭で牛の乳を搾って居居られましたが、片手で少しつつ搾って居られます。乳搾りは小生経験がありますから搾ってあげましょうと云ってバケツを両脛に挟んで両手でさっさと搾ってあげました。

事業団の場長の赤城さんに招かれて行って住宅でお話をしましたが、此所へ来られてから、まだ二年で以前はボリビアに四年居られ、ボリビアはガソリンがブラジルの半値だとのこと。今イグアスーには三十家族の日系が入っているが、どのように開拓して行ったら良いのかを尋ねられたものです。この日一日、ジープで案内されて移住者の方々を訪問、家は板壁ですが、日本式の上框

で、お膳でご飯を食べて居られました。玉ねぎ、トマト、棉、豆などの畑を見ましたが、何れもすばらしい出来栄えでした。ミーリョなど一茎に二本づつ確実に付いていました。鳥取県出身の谷口さんは小規模ながら製材を始めておられましたが、何れ養蚕をやりたいので桑も少し植えておるから見て下さいと申されます。三米にも伸びた桑が下から上まで青々としていたことです。

次には大工さんで家族の方が農業をされているのですが、パラグアイ政府から頼まれてボリビア国境に兵舎を建てるのに此方で全部木造りをして、軍艦に積んで現地へ運び組立てるのに約半年、国境に居た時の話をされました。ボリビア寄りは断崖絶壁、片方は密林手前はパラグアイ河に囲まれていて、ココ椰子が密生この実で丸々と育つ牛が何万頭と放牧されていてその牛を河に沿うてアスンソン迄追い、独乙本国へ輸出しているのだそうです。

木材も筏に組んでアスンソンに送り、ここから本国へ送っていて、余りにも伐採が激しいので一本に五グアラニーの税を納めさせることになったとの事です。

入植者は七年目を迎えるが、何から開拓してよいのか迷っておられるようでした。岩手県出身の岡本さんは六十過ぎの方でしたが、日本から左運転のジープも持って来られ、煉瓦建て家に住んで居られます。この地が一番気に入って、此所に骨を埋める覚悟とのこと。それまでブラジルから世界中を踏破されて来たとのことでした。この近くに那須博士構想の広大な南米農牧会社の土地があり、会社の担当者だといって小生に会いに来られました。

赤城事業団場長も南米農牧会社の隣接地三十ヘクタールを手付金なしで向う半年間、小生の名儀で保留して置くといわれ、再会を約して十二月二十五日、マリリアに帰りました。

昭和四十四年に入り、長男にパラグアイ視察にやりましたところ、地味の良いこと、日本語の徹底していることなど大いに共鳴、マンジョカの製粉設備を持って新天地開拓の希望を抱きました。そこで先づ土地の整理をすべく土地売り人に世話方を頼みました。

サンパウロのセナドール・フエイジョ街に南銀本店のあった頃で、南米農牧会社の株主であるという宮坂国人氏に面会すべく訪問して、橘氏の取次ぎで面会しました。宮坂氏は神戸高商卒業して結婚、五十家族の移民を連れてペルーに渡られました。カンナ園の重労働に沖縄出身の方達はよく耐え抜かれたという。後、パラグアイへ移り三十年間、五十才の時にブラジルに移られ、現在八十才である由。君が五十才でパラグアイに移り、頑張られるならば、後三十年に可成りの仕事が出来るであろうと励まされました。当時、北大の校長引退後、パラグアイ農牧会社に来て居られる吉崎千秋氏宛、紹介状を下さいました。

その頃、米領になっていた沖縄が日本に返還されると、百万近い失職者が出るであろうが、そのうち二十万人でもパラグアイへ移住させると、アスンソンからイグアスー迄、舗装路も完成していることでもあり、二百万人のパラグアイに十分の一の日本人が入り、愛国心の強いパラグアイ人と仲良く、住み良い社会を建設

するなら南米の一角に第二の日本が育つであろうと申されました。
早く土地を売ってとあせり気味でありますが、中々買い手が付かず、そのうち、ある伯人からの話では、土地売世話人に口封じをさせていることが分りました。若し平田が土地を売ると、マンジョカを買ってくれる処が無くなって、周辺の住人達が困ることになるから彼の土地は買ってはならんということで地団駄踏んだものでした。
五月十日、長女結婚、パラー州の平賀練吉氏方へ養子として移っておられた伊藤民雄君がひょっこり来訪されましたので、何事ならんと思いましたが、実はパパイに喜こんで貰いたいと云うことで安心しました。それは彼の花嫁さんが日本から来たのであるが、花嫁側の媒酌には岸本昂一氏を依頼してあるので、彼の方の親代わりになって貰いたいとのこと。喜こんでお引き受けすることになりました。彼は早速翌日出向いて行き、その期日には小生等も出席し、岸本氏宅での結婚式を厳粛に済ませて、パラー州へ帰って行かれました。
昭和四十五年七月二十五日、次女結婚。十二月五日マンジョカ製品の件についてリオ・デ・ジャネイロに行く。パラー州へ帰った伊藤民雄君からの便りで、彼の弟がリオの新潟鉄工に勤めているのですが、その弟の友人で、造船の仕事をしている技術移民の若者に嫁さんをお世話して貰いたいというのです。そこでニテロイまで足を伸ばして、山形会社の社宅でその若者に会いました。大変好感の持てる若者でしたから、帰宅後、家内の姉の娘をお世

話することにしました。日を決めてサンパウロで見合いをさせましたところ、双方とも気に入って翌年、挙式のことが決まりました。花婿の親代りになられるという山県富士夫氏をサンパウロ、アクリマソン区にお訪ねしました。山県富士夫氏は戦前に日本に帰って教育を受け、宮坂国人氏の一人娘さんと結婚、二子を置いて出征、シベリア方面で終戦、抑留二年後に帰還、後、ブラジルへ来られた方です。彼の父、勇三郎氏は、笠戸丸以前に来られた方で兄二人がブラジルで父の遺業を継ぎ、自分は遺言によって日本へ帰されたのだそうです。

父の勇三郎氏が各方面で活躍されていて、時のネルソン大統領が、エスピリット・サント州を買わぬかと相談を持ちかけられたので、早速、日本の外務省宛に手紙を出したのですが、その返信では、政府には、まだそれだけの予算がないということで、父は立腹して二度と日本の土は踏まぬと決心して、この地に果てたものですと語られました。若しあの時にエスピリットサント州を買っていたら、ブラジル国内に一州日本が生れていたことでしょう、と申されたものです。

昭和四十六年五月、この若者、小谷烈三君と姪の江原和子との結婚仲介人を勤めました。日本から武蔵野の農民学校長の藤崎盛一校長がマリリアへ来られて、日伯会館で立体農法についての講演がありました。田舎から出席しましたが、雨天でもあり、聴講者が大変少かったので、主催者のキリスト教会にも講師にもお気の毒に思いました。終ってから、サン・ルイス街の岡田啓吾さん

方でお泊りになることとて、小生も招かれて、お茶を頂きながらお話を聞きました。

聴講者の少かったことを残念がっておられましたが万人が上の空で聴き流すより、先生のお説を一人でも実行に移される方が現われたならば、それで良いでしょうと申し述べたものです。氏の立体農法とは、多角的、集約的農法で四、五種類を合理的に組合わせて栽培し、金肥を使わずに、有機肥料に頼らねば行詰まりが来る、と説かれました。ヨーロッパの農先進国では子供のうちで一番成績の良いのを農家の跡継ぎにするそうです。

フランスでは都会に住む者も町外れに小面積ながら土地を持って、野菜を作り、家族して楽しんで鍬を使っているということです。又、オーストリアのハンスハウゲという平和論者は、今から約百年前、戦乱の国々を廻って平和を説き、遂に平和を招来して、以後、犯罪者もなくなり、牢獄が博物館に変り警察も必要としない住み良い社会になったという話もされました。

昭和四十七年、次男、ピラシカーバ歯大卒業。ブラジルに来てから生れた小生の弟が、生活もまだ不如意の中から自分を歯大まで出してくれた恩返えしのつもりだといって、この次男の為には随分世話をしてくれました。

アンデス植民地も全盛期には百家族もの日本人がお年ましたが、二ケ家族だけになっておりましたところ荒木さんもサンパウロへ移転され、いよいよ小生だけとなりました。

製粉業と養蚕の外に永年作物としてコーヒー樹も二万五千本程、

植え込むべく苗を育てるのに近辺に植えたいという方もあるので、六十万の苗床を作り、皆さんの便宜を図ったものです。製粉に使用する薪も買わなくても済むよう、一アルケールのユーカリも植えました。

コーヒー苗作り、訪日

昭和四十八年三月の末、長女の縁先きの白丸さんご妻が日本へ行かれることになり、サンパウロのコンデデ・サルゼーダスのお宅の送別会に出席しました。平田さんも日本へ来なさいな、といわれましたが、まだ日本行きなど考えたこともありませんでした。おいとまをして、コンデ街のウニベルツール旅行社の前まで来ると、力行会の会長であった林寿雄氏にぱったり出会いました。久しぶりなので立話しをしましたが、氏の妹が、力行会の団体で訪日の手続きに来ている由。まだ空席がある筈だから、この際訪日を思い付かないかとすすめられるまま、ついその気になって手続きにかかりました。しかし、いくら家長とはいえ、人さまの送別会に行っての帰りに、訪日の手続きにかかったとは、家族の者にも簡単には云えません。そこでマリリアへ縁付いている次女を通じて話をすすめて貰いました。渡伯以来四十四年ぶりの訪日となりました。五月十日にビラコッポス出発でした。

アルゼンチン航空機でしたが大変なサービスで、ニューヨーク迄、ここで日本航空機に乗り替えました。日本着姿のスチュアー

デスを懐かしく感じました。高度一万米を飛んで雲界を下に眺めたり、六千米のロッキー山脈を越え、カナダの平原を横断して、アンカレジ国際空港着。氷河あり、氷山ありで、全山は黄色く染まっていました。ここから一路南下して日本へ向いました。

林立している氷山の上を過ぎると、氷山もまばらになり、海だけの上に来ました。間宮海峡を過ぎて二時間も飛ぶと機首を下げ始め、いよいよ日本へ着くのだと思うと、昭和四年に渡伯の時、五十八日も掛ったものを僅か三十三時間で帰って来たことが、夢のような感じでありました。

まん丸い筑波山が眼下に見え、海岸線一帯は赤い灯青い灯の美しかったこと、お伽の国へ来たようでした。三十三時間のうち、ニューヨーク迄の九時間が夜でしたが、その後の二十余時間が昼で、いよいよ狐にだまされているような感じがしました。

飛田空港は狭い所らしく海岸ぎりぎりで停ったようでした。税関は百五十名中、二番目くらいに早く、出迎人は五百人以上もあるようでした。小生の出迎えは誰か見えておらぬかと、心細く思いながら、ふと見ると長方形の布に〝平田武夫〟と書いたのを差上げておられ、急ぎ足で参りました。東京在の従兄三人の方が見えられ、握手を求め、しばらく声が出なかったものです。

一人は幼少の頃共に大阪で過した佐々木兵次郎さん一人はブラジルで若くして逝った本尾利明さんの弟、本尾武夫さんで日本電気の下請業、電輪社々長、もう一人はその補佐役である平田本家の跡継ぎの次男、平田昭二さんでした。東急ホテルに宿を取りま

したが、話が尽きず、明け初めた四時半になって床につきました。佐々木兵次郎さんは早稲田を卒業、三井系会社から三幸実業に勤め常務取締役をしておられました。小生の従弟の日野幸郎さんが、住居は大阪ですが仕事の関係で札幌に出張しておられましたが、明朝十時、東京の中央区、三井造船の屋上で会うよう、兵次郎さんが連絡をつけて下さいました。幸郎さんは都島工業卒の設計技師として活躍中です。

翌日、三井造船の屋上で初対面いたしました。三人で昼の銀座を歩きましたが、何分にも人が多く、みな日本人なのに驚いて、つい日本人が多いなあと口を滑らせると、ここは日本ですよ、と大笑いされました。千代田区へ出て宮城を遥拝、続いて明治神宮、靖国神社から泉岳寺へお参りしました。噂に違わず四十七士の墓には香煙が立ち昇っており、大阪の商人、天野屋利平の墓のあるのに気がつきました。この夜は渋谷区の笹塚在、本尾武夫さん宅にお世話になりました。日野幸郎さんは、大阪に帰られました。小生は、近日中に東京で催される海外日系人大会を済ませてから大阪や石川県へ行くように決めました。

次の日は、本尾武夫さんの案内で電輪社へ。約百人の従業員がおられました。本尾さんの子会社の常務の神永さんを紹介されましたが珍らしい性なので、ご親戚でブラジルにおられる方はありませんか、とお尋ねすると、昭和の初めに渡伯したきり便りもない従兄がいるとのこと、マリリアに住む次女の家の前に神永さんが住んでおられるが、お顔もよく似ていて、その従兄さんである

ことが分りました。広いブラジルの一億日本の一億の中で日本へ帰って三日目にこんな不思議なめぐり合わせに驚ろいたことでした。又、永年外地に居て、日本語を忘れずにいるものだと感心しておられました。

五月十六日、晩春の空も晴れわたり、今日の海外日系人大会を祝福するような好天気でした。海外から集った五百名近い日系人が一列になって桔梗門から宮城内を参観、大東京の真中に、こんな静かな区域が残されていて昔そのままの厳かさに頭が下りました。所々に旗を立てて、宮城内の除草手入れの奉仕団の人達が励んでおられました。

首相官邸でのカクテル・パーテーで田中角栄首相のご挨拶、渋い透通る声で、〃今後は決して日本は戦争はしません、戦後の今日の日本を隅なく見て帰って下さい。〃日本を背負う頼母しいお方であると感じました。各地の代表者の挨拶の中、カナダ代表の方が、現地の有様を披露されましたが、何か泣き事のようなことが多く聞きづらかったものです。開会の辞で、元ブラジル大使、九十一才の沢田節三氏、海外代表者の方々のご挨拶を承わりましたが、せめて法螺でもよい、大成功の話を聞かせて欲しかった、と申されました。

二艘の巡洋艦で東京湾を一周の後、靖国神社参拝後解散しました。

五月十八日、夜、上野駅から石川県へ向いました。三段になっている寝台車も珍らしく、何もかもエコノミックに出来ているこ

とに驚ろきました。午前八時、金沢駅着、父の生家から跡継ぎの平田長嗣さん始め多勢の方々に迎えられ、松任市平木町へ参りました。昭和四年八月にお別れに来た時のことを思い浮べました。主家は新築されていますが、納屋や蓮池など、そのままの姿で懐しく感じました。小憩の後、裏田圃にある祖先のお墓詣りをしました。

田は青む祖先の墓に香立てて

夜はお隣りの分家本尾の方々も見えて、ブラジルの近親の方々の在り方を話しました。

兼六公園、千代女の遺蹟など案内されました。大阪へは送り届けるといって、途中、京都に下車、小生の従兄に当る高野正夫氏方へ案内されました。友禅の絵を画いておられ、四、五人のお弟子さんもあって成功しておられました。東、西本願寺、二条城、御所、三十三間堂、金閣寺、清水寺、比叡山を越えて琵琶湖大橋を渡り大阪へ向いました。

大阪の大正区の大慶美寿さん方まで平田長嗣さんが届けて下さいました。美寿さんは東京の電輪社の本尾武夫さんのすぐ姉さんです。

この方の長男さんの案内で、川口町から舟津橋、中央公会堂、中の島など昔の面影は一つもありませんでした。宝塚少女歌劇にも案内されました。創設者の小林一三氏の生家がそのまま宝塚に移してありました。

大阪城の天主閣から六甲山脈を眺め、戦争で灰と化した大阪の跡形もなく、一億一心の力の尊さをつくづく想いました。次に日野幸郎さん宅に届けて下さいました。子供さん四人、この日、弟さん、妹さんも来ておられましたが、この妹さんが、小生の母の妹の寿恵子おばさんに生き写しで、名は令子さん、幸郎さんから戦時中の話を聞きました。当時十四才であった彼は放課後、藁人形に竹槍で突込みの訓練を受け、敵が本土へ上陸して来たら、竹槍で突込み玉砕する覚悟であったそうです。空爆を受けて大阪市中は、火災を起し、自分らの家も危くなった時、小柄だった彼の父が、この箪笥、百キロもあるのを背に負うて外へ出し、濡れ布を被せて避難、また幸郎君は幼少の弟を毛布に包んで燃えさかる火の中を潜り抜けて、お宮の境内へ辿り着きました。毛布を除けて見たところ、弟は失心していましたが、水道の水を吹きかけて命拾いをしました。鎮火してからわが家へ帰る途中、焼死しているのを跨いでも全く無感覚になっており、わが家の跡には、この箪笥だけが残っていたのだそうです。軍隊の手で焼死体は沖の方へ水葬したということです。

翌日、幸郎さんの妻の恵子さんに連れられ、お友達の宗川さんと一緒に尼ケ崎市を訪れました。西野田から阪神電車に乗り、淀川、姫島、千舟、杭瀬、大物駅で降りました。昔、千舟、杭瀬あたりは所々田圃があったものでしたが、もうすっかり変っていました。大物駅から歩いて城内の方へ見当をつけて行くうちに□（ますせん）の看板が第一番に目につきました。店へ入って尋ねま

すと、三代目ということで焼けた店を建て替えてありましたが、元の店の方が立派であったような感じでした。ここから数歩の先は大道筋であったのですが、今は大阪、神戸間の高速国道になり、物凄い交通量です。三階建ての尼ケ崎尋常小学校が、この阪神高架道より低く見えました。広々としていた運動場は跡形もなく、只前庭に植えられていた幼樹の綜櫚が二た抱えもあるくらいに太り、周り十五米にもなって空を蔽うているのを見て懐かしく感じました。

訪れた記念に僅かばかりの物を学校に納めようと教員室に行きますと、宿直の方が塚本先生は住所は変っているが訪れてあげなさいと親切に教えて下さいました。探すうちに表札が見付かり、乞うと玄関にお年はいっておられるが、昔の面影のある先生が出られて、小生が名乗りますと、しばらく考えておられ、やア、君だったなア、ラストで四年生を追い越したのは、とあの時のことを思い出して下さいました。色々と話すうちに、君の親友であった荒井謙次君が尼ケ崎に住んでいるから、訪れて見なさいと、住所を教えて下さりご夫妻で尼ケ崎駅まで見送って下さいました。

幸郎君の十才の長女と次女、長男それに一才半の次男を背負い五人連れで、手塚山から裏の万代池の遊園地の散歩をしましたが、ここに珍らしく〝八紘一宇〟の石碑を見かけました。奈良見物、大阪の道頓堀、心斎橋筋など見物、目抜通りは何処も高層建築に変っていて、川の都の大半の川が埋められている見当外れをいたしました。

母方の宮崎家のお墓が、天王寺裏の一心寺にあるというのでお詣りしました。ここのお堂の仏像は、一万体のお骨の一部を練り合わせて造られたそうで、五十センチ程の白いお骨そのままの色の阿弥陀様でした。京都の東山区山科にお住まいの宮崎清子おばさん方へ案内されました。宮崎作士おじさんが亡くなられてから、二人の子供を抱えて再婚もせず、苦労されて今日に至り、娘さん達もそれぞれ嫁いで良い家庭を持たれているのを見て、早速ブラジルへ手紙を書いて母上に報告しました。次女、昌子さんのご主人北村さんは、長岡天神の近くにお住いで、静かな良い所でした。この方の案内で京都中を見物させて頂きました。折角、ブラジルからおじさんが見えられたのに、京の舞妓さんに会わせねば私らの恥です、といわれて四条通りの古風な屋敷へ通されました。障子を開くと真下に清い水がさらさらと音を立てています。舞妓さんを見るのは初めてで厚化粧はしていますが美しい人でした。北村さんがわざわざ写真屋さんまで呼んで記念写真を撮っていただきました。小生は記念に、シャベーロの表は日の丸、裏はブラジル国旗の中にサウーバ蟻を入れたのを舞妓さんに上げ、この蟻がブラジルを征服するか、ブラジルが蟻を征服するか、という有名な蟻ですと説明、舞妓さんは祇園と書いた名刺に自分の勝代の名を入れて下さいました。

葉桜を受け流し往く京舞妓

翌日、家内の里、鳥取県へ行くのに、北村さんの車で宮崎のおばさんも同行、大江山を横に見て、福知山を越え、有名な砂丘を

見物、因幡の白兎の浜辺を通り東伯郡中山町へ着く。ここ小倉さんの妻なる方は、故小谷芳蔵氏の長女婿、故江原岩造さんの妹でご主人出征中は牛を追って畑仕事をして一家子供を守り育てられ、大変な苦労をされました由。小倉さんの案内で船上山へ登り、昔後醍醐天皇が身を潜められたという古跡を尋ね、ここの岩清水が美味しかったこと、頂上に〝船上山〟と刻んだ三米程の石碑がありました。見渡す限りの山々は若緑に被われていました。

若みどり船上山は妻の里

夕食の山菜料理のぜんまいなど京都のおばさんは、こんな珍らしい物を頂くなんて、と大喜こびでした。乳牛を飼っておられて新鮮な乳もご馳走になりました。大山へも案内しようと云って下さいましたが辞退して一泊で帰路につきました。山科に着いて塚本先生に聞いていた尼ケ崎の荒井謙次君へ電話を入れると、到底一人では迷うて来られないから山科まで迎えに行くという。翌朝、山科駅の出口で会うよう、互いに目印を相談して置いて、懐かしい再会をしました。

大阪の大倉商業を卒業後、志願兵として南支那へ出征、帰還しては又出征と三度も往き戻りしているうち終戦、南支那は運良く激戦が無く助かりました。戦地の赤十字隊に学校時代席を共にしていた為近笑子さんがおられ、戦地で二度巡り合い、戦後結婚されたということ、息子さんは神戸大学在学中とのことでしたが尼ケ崎のお宅で話すうちに帰って来られました。彼の妻は今でも病院勤務で夕方には帰るということでした。その間、二人で尼ケ崎

市中を廻りましたが、丸切り面影は失われています。もう少し遠いと思っていた所がこんなに近かったのかと迷いました。父が精米所を営んでいた別所町の家が傾いて取壊し寸前というところをお茶屋橋から見付け、荒井君と思い出の写真に納めました。

夕刻になって旧姓の為近笑子さんも帰られました。幼少の頃、小柄なぴきぴきして色黒い方であったが、今は色は黒い方だが、看護婦として立働らかれて、がっしりした体格になっておられました。同組生十五人のうち五人が戦死、二人が病死ということで小生の滞日中には荒井君の呼びかけで塚本先生を中心に同窓会を開こうと云って下さいました。

三月末に訪日されていた白丸さん（長女の縁先）が福島なので尋ねて行きました。駅へ出迎えて下さった鈴木さんという方にお世話になり、山の手のりんご園を見せて頂きました。養蚕もされていて大変忙がしい最中でありました。音防という所ですが、茅葺きの二階建てで、二百年にもなる古い家でした。梅雨時で雨が降り続いていましたが、雨音もせず静かなお住居でした。翌日は好天気になり、白丸さんご夫妻も共々四人連れで磐梯山を見ながら猪苗代湖でモーターボートで廻覧しました。野口英世の生家、宝物館を見、飯盛山の白虎隊玉砕の古跡のお墓に参りましたが、ここも年中香煙が絶えないそうです。

東京へ帰って新橋演舞場へ連れて行って貰いました。藤山寛美の演技を新旧の二部に亘って見物しました。一と幕終ると財布を投げるやらの大人気でした。中休みの時、廊下へ出ると、どこか

で見たことのあるようなお顔に会いましたが、後で思い出したら、ブラジルで読んだ、〝みんなで考えよう〟の著者、松下幸之助氏でした。演舞の幕を松下さんが寄贈されているのだそうです。

次の日は兵次郎さんの案内で伊豆半島めぐり。行きつけの旅館に電話して置いて伊東の旅館に着くと、前日からの釣開きで館主が十匹ほどの鮎を釣って帰られ夕食の膳に出して下さいました。給仕の娘さんはここの一人娘で、子供の頃から兵次郎さんは知っておられる由。

〝伊豆の踊り子〟を書かれた川端康成氏もここが常宿であったとか。

翌日は近くの山葵栽培を見学、後、バスで天城峠を越えました。紫陽花が美しく、夏ミカンが黄色く熟れていました。下田港では唐人お吉の墓、伊豆の突端、石廊崎に出て、灯台を背景に写真を撮り、大仕掛の温室があって、コーヒー、マンガ、プリマベーラなど兵次郎さんに説明しました。帰りはハイヤーで十国峠から箱根、芦の湖、小田原へ出て新橋駅に着きました。

日脚伸ぶ映る芦の湖逆さ富士

この夜は本尾武夫さん方に泊り、翌日は神永さんの案内で原宿の菖蒲園、五色の菖蒲が美しく、そこここに絵師がキャンパスを立てていました。最も見事に実物以上に色彩を出している画家の後で立ち見していたものです。

花菖蒲絵師の背後に人が佇ち

高田の馬場から新宿の繁華街を見物、楽しい一日でした。

次の日は新潟へ向い、新潟から新発田行きの支線で葛塚駅下車、伊藤民雄君のご両親に迎えられ、北蒲原のお住居へ行き、ブラジルの情況、民雄君のことなどお伝えしました。長男さんの案内で青々と伸びた田を見せて頂き、蒲原の水田に余分に水が浸らぬよう長い堤防に十数本のパイプを入れて、川へ流し出している設備には驚ろきました。殆んど国の費用ということでした。新潟港に出て見ましたが小雨が降っていて佐渡島は見えませんでした。半年程の間に五百米からの堀割を作って船を入れるような作業が進んでおりました。この堀割の土は、航空母艦のような船に数本のパイプで水と混ぜ合わせた泥水を遠い低地へ送り出して埋立てています。この埋立地に早速、梨、ぶどうなど植え込んであるのに感心してしまいました。

伊藤民雄君のお父さんは、政府の減反政策に反対で主食の米が万一不足するようなことがあっては大変なことになる、と云っておられました。

石川県へ帰って来ると、長嗣さんの妻の文さんが大変な働らき者で、稲作の副業にプリンス・メロンの栽培をしておられますのを手伝ったり、ブラジルから小生が持って来たドアスカーラの鍬に柄を入れて畦の除草をしました。

七月十一日から山開きとなり、長嗣さんの次男良仁君が、登山隊のベテランでこの頃ブラジルから研修に帰っていた橋本敏子さんと三人で、白山へ登ることにしました。松任から電車で鶴来へ、そこからバスで別当まで来て山登りです。石ころ径や急坂、谷間

のせせらぎや鶯の声、時には砂防工事のダイナマイトを聞きながら二千米の所へ来ますと、山林も低くなり、高山植物のお花畑です。五百年の樹令という這い松が五十センチ程の高さで茂っていました。

白山は二千七百二米の高山で、二千三百米の所に二棟の民宿があり、五百人ぐらい収容の部屋、一軒の売店もあります。頂上の旧火口は紺碧の水を湛え、結氷が浮いています。下界の眺望は亦すばらしく〝お山の大将おれ一人〟という感じになったものです。

残雪をだるまに仕立てシャッタ押す

室戸の民宿では、持って来たお米を雪溶け水で洗い飯盆で炊くのですが、殆んど煮えた頃、逆さにして置くと普通に煮えることを良仁君に教わりました。山開きの日で、福井県から娘さんが一人、山の測量士が三名と、七名だけでした。板壁の隙間風が寒く、稀薄な空気で頭痛がするし、敏ちゃんは殆んど眠れなかったそうです。午前四時、頂上近くのお社から太鼓が鳴りこれを合図に起きて頂上を目ぎします。まだ明けやらぬ夜空に、ご来光を仰ぐのは、何とも形容し難い景観でした。

下山の時は険しい径を避けて楽な方をということでしたが、登りよりも却って骨の折れるものだと気が付きました。別当まで下る間に二百名以上の登山者と出会いました。鶴来の町は金魚の養殖で、何万と色々の金魚を珍らしく見たものです。

松任市農協の催しで名古屋の夏場所大相撲見物に長嗣さんの席

を譲って貰って出かけました。二台のバスで百名の団体です。バス内ののど自慢で〝我れは海の子〟を唄ったら、ブラジルにいて、よくもこんな唄を覚えていたものだと珍らしがられました。一合瓶の地酒が配られましたが、飲んだ勢で喧嘩が始まりました。日本での日本人同士の遠慮の無さが、こんなことになるのでしょう。

石川県から横綱になって初土俵の輪島に大変な応援でしたが、この時は琴桜が優勝しました。力士の取組みを目の当りにして、その力斗ぶりに感じ入ったものです。

その夜は三重県の御在所泊り、猪料理を珍らしく頂きました。この時、上座に座らされて恐縮したものです。明くれば、日本一というロープウエイで御在所登り、琵琶湖大橋から敦賀湾に出て夕食、湾内の小島の上に盆栽のように松が生え、日本ならではの風景でした。平木に着いたのは九時過ぎになっていました。

京都の宮崎のおばさんから、明日からの祇園祭に招かれました。一、二日休んでから出掛けては、と云って下さいましたが、翌朝にすぐ京都に向いました。

京都、大阪へのおみやげとしてプリンスメロンを貰って出掛けましたが、米原駅から新幹線に乗り替え、京都の山科へ着いた時は、ぐっしょりの汗をかいていました。おばさんが昼風呂を沸かして下さったことでした。お昼過ぎから京都の町へ出て、八坂神社から出る神輿は昔からそのままの朱の布に凝った刺繍の模様で、鐘や笛を鳴らし乍ら群衆に踪を撒きます。外国からも多勢観光に

来ていて、四十万の京都の人口が八十万になると聞きました。一亘帰ってから夕刻また出掛け、四条通りから大文字山のご神火を見物、山の中腹に大の字が燃えているさまは、全く変った行事であると感じました。平安神宮では鉄筋の大鳥居で写真をとりました。

翌日、北村さん宅を訪れると、広い庭に野菜を作っておられ、空地に何を植えたらよかろうか、と聞かれて、落花生豆を蒔いて見なさい、と申しました。滝井種物屋へ行ってみますと、たかが種物屋と思っていたのに、三階建てのビルであるのにはびっくりしました。

京都から神戸の先の加古川駅、その先の西脇市の小谷烈三君の里へ参りました。この家はお餅屋さんの卸しをしておられます。小豆は北海道産で十五俵積んでありました。新潟製の機械で、餅の外に餡を付けたり中に包んだり、大した機械もあるものです田園の中に工場と住宅があり、神戸の三ノ宮までお餅を運ばれる長男さんに便乗して、大阪へ帰りました。

日野家から五百米の所に住吉神社があり、祭礼の夜お詣りしました。カーバイトの夜店が並んでいて懐かしく感じました。朱塗りの社殿は立派なものでした。

日野家では誰も田園生活を知らないので、一度行って見たいと云うことです。小生が石川県へ帰る時に、夏休みを利用して、皆で行くことになりました。幸郎君の妻の恵子さん、十才の長女、愛子さん、次女の裕子ちゃん、長男の隆成君、次男のあきよし君を

連れて汽車の旅に出ました。移り変る景色に、上の二人は一所懸命にペンを走らせていました。

平木町に着くと長嗣さんの長男、長久君は、明日から彼の運転で能登めぐりのプランを立てて下さいました。長女の愛子ちゃんが、稲を刈るポーズを写真に撮ったりして、何から何まで珍らしく大喜こびでした。

能登めぐりでは、七尾の先の千里浜へ出て、穏やかな海で海水浴、軍艦島を望む所で民宿、半島でとれた新しい魚に舌鼓を打ちました。次の日は曽々木海岸から半島の先端に出て灯台を背景に写真をとり、有名な千枚田の稲は黄金色になっていました。今、国の文化財となっている下時家の屋敷も見物、その昔、前田の殿様へ塩を献上したとの事です。巌門洞窟を潜り、黒崎岬通過、伊勢の二見ケ浦と同じ形の岩があったのも珍らしく、輪島塗りの店も見て、夕刻、平木町に着きました。

長嗣さんが温い西瓜に食当りして入院され、ひどい目に会われました。しばらくは養生と云うことで、文さんのお手伝いをして、稲刈りをすすめていったものです。刈取機によって籾になり、袋に入って出てくるので、昔の稲刈りとは雲泥の差です。ブラジルの農業業で鍛えた体には一日の仕事にも疲れを覚えない楽しい日々でした。二百俵余りの稲を十日足らずで刈り取り出来ました。水不足の時に備えて、政府が掘抜井戸を掘ってくれているそうです。

お盆のお墓参りでは十二の切子ボンボリに、ブラジルからの分

家の平田の名前を書きました。

大阪へ引返して、京都の従妹、大阪の従弟家族連れだって、宇治、黄葉山万福寺にある日野家先祖代々の墓参、西本願寺裏の佐々木の墓参、渡伯四十四年間に亡くなられた方々の墓参を済ませました。

母のおじの未亡人、松谷らくさんが子無しで八十八才の一人暮らしをしておられますが、小生の母が渡航中に出した葉書を三枚とも保存しておられたのには愕ろきました。

八月末になり、大阪の皆さんや石川県の方々にお別れの挨拶を済ませて東京へ出ました。兵次郎さんが、まだ行かなかった所へと案内して下さって、鎌倉の露坐の大仏、源頼朝が刺された大銀杏、逗子海岸、稲村ケ崎を見、日光の東照宮へ参拝しました。さすが日暮しの御門は贅を尽したものでしたが、何か奥床しさが欠けているように感じました。左甚五郎のねむり猫、入口の柱の登り龍、下り龍は支那から輸入されたものだそうです。宝物殿で見た家康の手相が兵次郎さんのものとすっかり同じものであるのには驚いたものです。いろは坂から中禅寺湖に出て、華厳の滝を見ては、イグアスーの滝と比べて、これも滝のうちに入るのか、と思いました。

長嗣さんのご紹介で埼玉県の豪農の宅を訪問、鴻の巣の農事試験場で世界中からの農業機具を見学しました。小生、落花生豆の収穫機を考案中でしたので、種々の参考機械をコピーして下さいました。後三日で離日ということで、本尾武夫さん方で荷作りを

済ませておき、四十何階のブラザー・ビル、東京タワー、浅草の観音さん、仲兄世、銀座を見物、丸ビルに入り日活の映画を見ましたが、テレビに圧されて、腰掛のビロードが破れたままであるのに気が付いたものです。日本橋から有楽町と歌で有名な所を通り三越のデパートに入りました。

ブラジルの熱帯果物のアバカテ、マンガなどの高値にはあきれたものです。

生涯に忘れ難い想い出を残して滞日四ケ月の旅を終らんとする時、多くの方々のご厚情が身に泌み、感謝に堪えませんでした。九月十五日、飛田空港出発の折には、大阪から東京まで、日野幸郎さん一家、石川県から本家の長嗣さん、東京の昭二さん（長嗣さんの弟）の奥さんと娘さん、佐々木兵次郎さんたちに見送られ再会を約して飛び発ちました。

帰路のコースも同じく、アラスカに向いましたが、悪天候のためにアンカレヂに降りられず、一時、米軍の基地に着陸しました。軍人の酒保に招じられて、百五十名からの客に、棚にある菓子類、果物を自由に食べてもよい、とのおもてなしを受けました。そのうちに天候回復の報せがあり搭乗、この百五十人中〝サンキュー〟礼を述べた者は小生一人のようでした。アンカレヂの山々は枯木立ちで冬に入った感じでした。ここからニューヨークのケネディ空港に着きましたが、日航機から乗り替えるべきアルゼンチン機が待機しておらず、ニューヨークの二流ホテルで二泊する羽目に至りました。その代り、思いも寄らなかったニューヨーク市の

見物が出来たことは又、勿怪の幸でもあったわけです。
食事は日本料理店、夜は案内人付きで八十何階のエンパイヤーステートビルに上りましたが、ベトナム戦のための節電、無灯のビルが多く、日本の夜景と比べて淋しいものでした。大劇場で三十人以上の半裸の美事なレビューを見、黒人女性の美声を聞いたことです。
夜の一人歩きは絶対禁じられ、もし歩くとすれば、ポケットに二十ドルだけ持って歩けというのです。戦線から帰った兵士は麻薬中毒で、一本の麻薬が二十ドルで買えるところから襲われた場合、二十ドルだけさらって逃げるというのです。
市街では店頭の商品も少ないようでした。何番街は黒人街、ユダヤ人の街、高級者の街路と区別されていて、人種差別の甚だしさには呆れてしまいました。河の遊覧船で、アメリカ発見上陸されたという女神の像を見てしばらく行く内に、古い三階ぐらいのアパートが建ち並んでいて、望遠鏡で見ると窓に黒人ばかり見掛けたものです。
ホテルでの朝のコーヒーは茶碗の底が見えるぐらいで、コーヒーとは名ばかりのものでした。ブラジルへの土産にマンシエッテ級のグラフを手に取って見ましたが、セックス丸出しの写真がでかでかと、どの頁にも載っていて如何に風紀が乱れているかを感じました。
二日の後、アルゼンチン機で雷鳴しきる中をブラジルへ飛発ちました。晴れ渡ったアマゾン河を眼下に見て、密林の上を通り、リ

オのガレオン空港、そしてビラコッボス空港へ無事に着陸しました。サンパウロの弟やマリリアから長男も迎えに来てくれていました。一旦サンパウロに落付きましたが、日本での車の速度から見て、ブラジルの八十キロ、百キロを見ると、危険に感じられたものです。

マリリアへ着いた日は、丁度、次女に次女が生れて一週間目で、孫のお祝いをしている時で、留守中も皆変りなくいてくれました。

昭和四十九年、二万五千本のコーヒーを植え、椎蚕室を煉瓦建てに改築するので、棟も上げて梁と束の筋かいを釘で止めるために跨っていたら、上の釘が効いていなかったとみえて、上材もろ共に落下しました。右足首が反対向きに抜けていたので、若者を呼んで、足首を元の位置に捩りもどしましたが、立つことも出来ず、直ぐ病院に走りました。石膏で固められ以後、四ケ月、松葉杖の生活を余儀なくされました。三才の時に右脚を折り、五十年後に同じ右足を折るなど変なめぐり合わせであったものです。

昭和五十年、マンジョカからアルコールが取れるということで、マンジョカにも返り咲きの事機到来と思い消極的になっていた製粉工場も其処此処の修理をして再発足の構えを致しました。

大晦日の夜、不思議な夢を見る。密林の中で道に迷っていると、前方に火の玉が現われ、それを追っていくと大道筋に出ることが出来ました。何かの暗示であるように思われました。

土地売却・俳句開眼

昭和五十二年、四女結婚。七月五日に披露宴を済ませて数日後、十五キロ距った処の一伯人がマンジョカ工場を譲ってくれぬかとの話で長男は土地も一緒に買ってくれないかということになりました。長男はこの際整理した方が良いといいますが、小生としては、弟とわが子十三人の生れ育った心の古里ですから手放しがたく、一週間考えることにしました。その間、友人の深井芳郎君と大家　好君とに相談しましたが、意見はやはり分れてしまいます。

買い手の方は、マリリア近郊の半アルケールのシャーカラと海岸にある別荘と何がしかの現金とで支払いに当てるというのです。視察の結果、決心して売買契約を交しました。

十二月、次男結婚。マリリアの中心から二キロ半の地点のシャーカラに移り、ご近所に挨拶廻りをいたしましたが、三、四日の後、同植民地内で三キロ程離れた所で永らく養鶏をしておられる瀬尾清吉さんが立寄られて、今日の俳句会へ一緒に行こうと誘われました。俳句に趣味は持っていますが、学校にもあまり行ってはおらず恥をかくのがせいぜいだからと辞退いたしましたが、先づ句会の雰囲気を見るだけでもといわれてお供をしました。これがご縁となり、俳号も〝一耕〟とつけて頂いて今日に至りました。

巾五〇米の傾斜地ですが、下の方に湧水もあるので二年がかり

で七つ池を造りあげ、大きい池の中には八角亭を建て、何度か句会を催しました。表庭には泉水を造り、その中にミニ金閣寺をつくったりして、住み良い所に変えて行きました。マリリア墓地に五百米の近い所で、父の墓参りもいつでも歩いて行けるし、余生はこの地と決めております。

ブラジルもインフレが激しく、住みにくくなって強盗が増え、弟も息子　歯科院も患者の装いをして来て強盗に早変りという被害を受けたことから、般若の面を彫って災難除けに持たせました。しばらく般若を彫　りましたが、恐ろしい面ばかりでなく笑い顔も彫ったら、と家内からもいわれ、俳句の先輩の故・田辺道子さんから、お多福の面を借りて彫り始め、俳句と共に楽しい余生を忙がしく生きる道を開かせて頂きました。

昭和五十三年五月、長男結婚十二月、石川県から海外家族慰問団に加わって平田長嗣さんが来伯され、四十日間、各地を案内して廻りました。県人の慰問、サンタ・フエー・ド・スールの弟の所、パラナ大河へモーターボートを浮べての釣り、ウルブフンガ発電所リオ・デ・ジャネイロ、ヘトロポリスの帝政時代の宮殿、首都ブラジリア、イタイフー滝などなど出来るだけの観光案内を致しました。一月末、サンパウロで小生一族が集まり歓送会を催し、お別れしました。

昭和五十四年、小生と家内は相年で共に還暦でサンパウロで子供達が赤飯を炊いて盛大に祝ってくれました。

昭和五十五年、石川県から従兄に当る平田吉夫さんと小野幸一

郎さんが見えられましたので、先年の長嗣さんの時と同じようなコースを案内し、五十六年の一月末に帰って行かれました。

我流木彫始める・金閣放火

マリリアで有名な田辺景三氏の画と書に加えて小生の未熟な彫刻を市及び日本人会主催の日伯交流展に出展、同じく年末にはガルサの芸術祭にも出品しました。

十二月十九日、マリリア市庁舎の前庭、三笠ノ宮殿下お手植えのイッペ樹の庭に、半年掛りで製作したミニ金閣寺を寄贈しておりましたが、五十七年八月二十六日夜中に不良分子によって放火され無惨な姿と化してしまいました。何期にも亘ってマリリア市会議員を勤めておられる岡川秀春さんが立腹して市長に不用心を詰られ、ブラジル人の野蛮さを罵られたものでした。金閣寺は日本の本物も放火されたので、妙な運命にあるようです。昭和五十七年はマリリア市と東広島市と姉妹都市の調印式に東広島市から代表団が来伯され、そのお土産にといって市長から彫刻品を物色に来られました。その時に頂いた代金を基にして、今度はマリリア博物館に納める寸法で再び金閣寺の製作に取掛りました。約三ケ月を費し六月十八日の日本移民の日を期して寄贈することができました。

昭和五十七年七月二十五日は小生ら結婚四十周年記念で子供達

全員で祝ってくれましたが、子供たち相談の結果の提案として、小生にママイを案内して日本へ行って来なさいということです。父母を思ってくれる子供達に頭の下る思いでした。

九月十五日、出発の運びとなりました。日航機でマイアミ経由、ロスアンゼルスから成田空港へ着きましたが二十八時間の飛行で、九年前の時よりも五時間の短縮です。狭い日本にこれ程の空港をよくも造ったものだと思うぐらい広い立派な空港です。

成田空港は東京から遠距離のために出迎えの人が少ないのかと思いましたが、税関を出てから始めて出迎えの方々を見掛けました。東京から平田昭二さんの奥さんと、石川県から平田長嗣さんが出迎えに来て下さいました。杉並区の昭二さん方でその夜はお世話になり、翌日金沢駅行き、多勢の方々に迎えられて、松任市平木町に落付きましたが、九年の間に、長嗣さんのお母さん、お隣りの本尾美農理さんが亡くなられていました。

長嗣さんの長男、次男とも結婚されていて四人の孫も出来、賑やかな家庭になっていました。稲の刈入れは済んでいて、減反の田の大豆が収穫期ですが、台風の予報が出ていたので、村の人々が夜中まで掛って積上げられました。幸い、この時は台風は逸れて行ったそうです。二日程休息の後、京都の宮崎のおばさんを訪れ、又長岡天神脇の北村さんを訪れました。京都見物の後、大阪へ行き佐々木兵次郎さんに迎えられ、粉浜の日野幸郎さん方へ招かれました。四人の子供さんが、みな立派に成長されていて、長女は早や恋愛中でありました。兵次郎さんは高血圧のため、現役

の仕事を退いて大阪へ帰っておられたのです。
紀州白浜の日野幸郎さんの別荘に案内するといわれましたが、又々台風予報が出たので予定変更、京都経由、鳥取県赤碕町の家内の里へ向いました。赤碕駅で多勢のお迎えの中の一人は直ぐ妻の姉であることが分りました。姉妹相抱いて言葉もなく感涙に咽びました。五十三年ぶりの再会でした。妻のおじさんが倉吉の病院に入院中であると知らされて、お見舞につれて行って貰い、その足で三徳山のお社へ参り、栃の木の実のダンゴだという変った珍らしい物を茶屋でいただきました。
遠縁に当る高力勝美さんという方が、赤碕町の観光局長を勤めておられて大変お世話になりました。
妻の同窓会を開いて下さって、三十名からの方々が歓迎して下さいました。地元だけでなく遠い所からも馳せ参じて下さって、その人たちの間でも三十余年ぶりの再会だという方もあったそうです。

同窓生集う窓辺に木守柿

赤碕町字中村の方々が歓迎会を催して下され、至れり尽せりのおもてなしを頂きました。
妻の従姉の鉄田政子さん、足立直信さんの息子さん境港の岡田国代さん（妻の姉）共々、大山の秋景色を眺めながら米子市へ出

ました。沿道はネギの栽培が盛んでした。境港から島根県へ渡る大橋を通り、松江城を観覧、この年は島根県が国体の主催地になっていて沿道は美事に花を咲かせて飾られ、出雲大社もテープで飾られていました。数日後には、この地へ天皇陛下が行幸されるということでした。日本一という御椅灯台を見、その夜は玉造温泉で一泊、次は足立美術館から大山神社、名和神社に参拝して帰着しました。

翌日は赤碕町挙げての大運動会、世話役の佐伯さんから原稿を書いて貰って妻が挨拶、大会委員長の高力さんからは小生らが十三人の子福者であることまで披露されました。

次は高力さんに連れられて、先日の島根行きとは別のコースで関の五本松へ行きました。五本松のうち只一本だけが残っている古木が剪定されていたので一米程の枝を貰って帰り、赤碕町で三本買い、高力さん方の納屋で福禄寿を四つ彫りました。高力さん、小谷茂夫さん、お寺のお坊さんに記念にさし上げました。

米子の皆生温泉にも一泊して楽しい旅行をさせて頂きました。

境港の岡田国代さん方に二泊のとき、大阪の心斉橋筋のような商店街を歩いたのですが、或る書店で新発売の講談社の大歳時記を見付け、二万七千円を百ドルで話を付け、送料はサービスということで、東京杉並区まで送って貰うことにしました。

国代さんのご主人は満鉄に勤めておられて、戦争になり、帰還しては又出陣、三度目に戦死されて、二人の子供を抱えて、三十三才から現在まで、随分苦労なさったようです。娘さんは既に縁

付いて大阪方面におられる由。どこのご家庭でも息子が、父が、主人が、というふうに黒額が祀られていました。戦争の尊い犠牲のいかに多かったものか想像に余るものがあるようです。

鉄田政子さん方で長くお世話になりましたが、表が静かな食料品店でご主人が材木店に勤めておられまして、木片を貰って小型の福禄寿を十ケ程彫り、それぞれに進呈しました。

高力さんと小谷さんのご案内で、鳥取市庁訪問、郊外の渡辺美術館で鬼面の陶器に見とれて皆さんにはぐれてしまいました。砂丘のラクダを背景に妻の写真を撮り、砂丘名産のぶどう、とろろ芋の栽培の所など案内していただきました。

昔はこの地方は嫁殺しといわれた程、農作物にいくら潅水しても吸い込んでしまって、水運びの重労働は大変なものだったそうですが、今では五十米四方くらいの間を置いて水道が完備、蛇口を開きさえすれば撒水できるようになり、隔世の感を深くしました。今や日本の農業は冬の最中でも雪国でガラス張りのスチーム入りにして西瓜を出荷するまでになっています。

二ケ月滞在の予定の半ばが鳥取県で過ぎたので石川県へ行くことになりましたのを、遠いところですから　汽車で行く、と申しますと車で送るといって下さいました。足立家の長男、照夫君の運転で、岡田国代さん、鉄田政子さんも同乗で出発しました。岡山県へ抜け、京都から大阪へ出て、石川県へ着いたのは、午後四時を過ぎていましたが、一泊もせず、兼六公園を見て帰るといって直ぐ発って行かれました。

石川県では小生らが来るのを待っていて下さって、小野寺一郎さんご夫妻と平田吉夫さんと共々に長野の善光寺詣り、先づ富山県の親知らず海岸に沿うて走り、日本アルプスの黒部峡谷を縫い三千米の木曽御岳に登りました。もう初雪が降っていて珍らしく手に取って見たものです。

紅葉の美しさに見とれてしましました。別所温泉で一泊して、志賀高原のリンゴ園を見学しましたが園の中がアスファルト道になっているのには驚ろきました。

いよいよ善光寺で暗闇の通路に手を触れて錠に当ったら良いというので暗闇を通り抜け、近くに栗飯が名物で折詰を買ったものです。

帰路は松本市に出て、やはりアルプスを越え、巾の狭いアスファルト道で車とすれちがうと崖の際など危険を感ずる程でした。温泉で一泊して、翌日、熊牧場を見ましたが、十四、五匹の日本熊が木に登ったり、熊同士相撲を取っていたり、珍らしく眺めたものです。木曽の頂上の売店は今日限り閉めて下山するのだとのこと。その日、無事石川県へ帰りました。夜半から大嵐になり一日違いで早く帰って難を逃れたことでした。

松任市農協の呼びかけで、百余名の団体で能登巡り能登大橋から半島の先端に出て、水族館見物、帰りは日本一高いビル旅館の加賀屋旅館、落成当時、陛下がお泊りになったということでした。

平田良仁君の陶芸出品が朝日新聞主催の陶芸展に入選して、福井県の陶芸村へ見学に行きました。この地方は大変良質の粘土が

出る所だということでした。帰りは寄り道をして武生の菊祭を見ましたが、小菊を二ヶ所から伸びさせて、二米ぐらいの象の形に仕立てたのや、四十七士に菊を着飾らせたのも美事でした。

この平木町の長嗣さんの家から一キロほどの所は、日本海岸ですが、自転車で行って磯に打上げられた流木を拾って帰り、雨天を利用して福禄寿を彫り、それぞれの方々に差上げました。

京都ではおばさん方に泊り見物して廻りましたが、平安神宮の新美術館に入り、等身大の彫刻を隅なく見て歩きました。シネマ館で高倉　健、森繁久弥主演の青函トンネル貫通までの苦節を見ましたが実際はシネマ以上の苦難であったことと察しられました。四条通りの刃物店で彫刻用のノミを二十丁程手に入れました。

大阪へ戻り宝塚へ行き妻に少女歌劇を見せ、奈良東大寺参拝あと和歌山県南端、白浜にある日野さんの別荘に泊り、千畳敷京大の水族館を見物しました。紀勢本線で串本、大島を見ながら勝浦に出、那智の熊野神社は五百段の石段の上に社がありました。那智の滝を見ながら下りると途中は一刀彫りの店があって、彫刻品を写真に撮らせて貰いました。店の書棚に彫刻用の本があるのが目につき、無理を頼んで二冊譲って貰い小さな仏像の顔だけ彫ったものが五千円もしました。

帰りのコースは松阪から伊勢の内宮、外宮参拝、御木本の真珠を見て鳥羽へ出、もと南米航路のブラジル丸がレストランになって伊勢湾に横付けになっているのが目につきました。

京都の人たちと大阪の日野家一族と万福寺で落合う約束で日野

家の墓参をしましたが、墓所からは遠く伏見城が眺められ、近くには鉄眼の一切経の宝物殿がありました。

京都のおばさんは小生の母が亡夫の姉ですから、達者なうちに一度会いたいと云われて一緒にブラジルへの手続きを済ませ、東京へ出て、平田昭二さん方に泊りました。出発までを箱根見物に連れて行って貰い、湯湧谷で百度の硫黄湯が噴き、これで卵を茄でて食べれば無病息災ということです。

十一月十五日、二ケ月の楽しい旅を終え、皆様にお別れして成田から飛び発ちました。折角、おばさんがお出で下さっているのに、母は洸惚の人となっていて分らないようでした。

二十日間の滞在中、マリリアの神戸生糸工場、サンパウロではブタンタン、イビラプエーラ、イピランガ、リオ・デ・ジャネイロ、イグアスーなど見物、元気に帰って行かれました。ブラジル人女性の顔が明るいことや、誰がどんな着物を着ておろうと全く無関心のようで気楽だというのが印象に残ったようでした。

昭和五十八年九月十一日、西本願寺御門主と裏方様がマリリアのお寺へ巡回されました。そのお土産にといってお坊さんと会長さんとが、彫刻を見に来られ、棚の親鸞上人を指して、もう少し大型に彫ってくれないかといわれ、三日の余裕で仕上げて献上しました。

アンデス親睦会

かねてからの懸案であったアンデス村出身者の第一回親睦会を当シャーカラで開くことになりました。新聞にも案内を載せましたから広く反響を呼んで、ミナス州、マット・グロッソ州、パラナ州からも来られ予想以上、百余名の集まりとなりました。この時、大家好君が自分は事業のことでいつもあくせくしているがそれに比べて君が一番の幸福者だなアとつくづく申されました。

昭和五十九年一月十日から二十日間、長女の家族に連れられて、パラナ州、サンタ・カタリーナ州、リオグランデ。ド・スール州の旅行をしました。この南三州は独乙系、イタリア系が多く、移民百五十年の歴史を持ち、初めから永住の構えでヨーロッパ風の建物が多く、ブラジル国内でブラジルで無いような感じを受けました。町は清潔だし、田園では祖先からの土地を守り、樹木を大切にし、牛を飼い、山腹に部落の墓地が質素で日本のお墓のような感じでした。

サンタ・カタリーナ州のブルメナウ市から二十キロ程奥のチンボーという小さい町で、独乙人の彫刻師が居ると聞いて尋ねて行きました。大変喜こんでくれて初対面にも拘わらず朝食を出してくれました。二十余年の彫刻生活で傑作品が部屋も狭しと並べられていました。この地方で作られたノミ四丁を分けて貰い、泊って行けとまでいわれましたが、再会を約してイタジャイ港まで引返しました。

サンタ・カタリーナ州及びリオ・グランデは到る所谷川があり、

水田も多く、日本とよく似た地方で、農業については好条件に恵まれ、サンパウロの日本移民の方が負けているのではないかと感じました。

二月二十日、三女結婚、サンパウロでの披露宴で挨拶の最中、急に右の眼が霞が掛ったように見えなくなりました。翌日からセマーナ・サンタの連休なので、一週間の後、眼科医に診て貰いました所、眼だけの血圧が上って網膜が汚れた為で急には好くならないとのこと、半年くらい通いましたが自然に吸収されるのを待つより仕方ないと諦ました。

天村句碑献建

昭和六十年、マリリアを本部とする俳句結社のイッペ誌百号記念で、小生を意義ある俳句余生に誘って下さった瀬尾天村師へお礼の心持から句碑の建立を思い立ちました。娘婿の車でサンパウロの石屋から大きな石を運んで貰い、句は先年、天村師が発刊された句集〝鯉幟〟の九百五十句の中から小生に選ばせて貰いました。天村師が訪日の時、郷里で第一番に浮んだといわれる〝故郷の春の土掌に享けて嗅ぐ〟を刻むことになりました。師の毛筆でひらがな書きにして石に貼り付け文字を刻みました。

さて句碑を何所へ据えるかということで、岡川秀春市会議員のお世話になり市長に交渉して、市庁舎前、三笠宮様お手植えの

イッペ樹の前方と決まりました。

１９８５年３月１６日、天村句碑建立
イッペ吟社句友達

アベニーダの目抜通りで碑の土台からポ語訳の銅盤、除幕式の案内状まで市で引受けて下され、恐縮の至りでした。三月十五日は、タンクレード・ネーベス新大統領の就任式が、首都ブラジリアで行われましたが、その翌日、十六日除幕式が行われました。日伯有志の参列、軍楽隊まで準備された中で、市長、天村師、小生でテープを開き除幕式を無事に済ませて感激に満ちました。

サンパウロ州内での句碑は十指にも満たぬと思いますが、殆んど師の没後のもので、どうして存命中に建ててあげられなかった

のかと惜しまれます。マリリ郡は元、二千家族からの日系人が居て栄えた町ですのに今迄何一つ日本文字で残し得なかったところ、これで聊か先没開拓者の霊を慰さめることになるかと思います。

続いて五月にはイッペ吟社本部十九名の句友の句を一句づつ刻み合同句碑を造り、当シャーカラの庭に建てました。

マリリア博物館に納めたミニ金閣寺
市議・岡川氏の手にある額は原爆の彫刻した物

母の死、工房火災

六月十五日、七女結婚。十二月一日、長らく恍惚であった母が

八十六才を最後に安らかに永眠。

昭和六十一年七月二十九日夜半、七米平方の物置及び工房を全焼しました。火の弾ける音に目が覚めた時は既に半ば火が廻っていて、電話で呼んだ消防車が来たときには棟が落ちていました。夕方、丸鋸で木を割ったときに飛んだ火屑は消した心算でしたが、アッという間の失火でありました。大事な大事なのみが焼け落ちた瓦の下敷きになってしまい、慌てて踏んだ火の残りで足裏に火傷までしてしまいました。二日後には　ペルナンブコ州に行っている五男の結婚式に、兄弟たちが出席できないので、せめて両親だけでもと子供達が準備してくれていた矢先の突発事で止むを得ず焼け跡をそのままにして出掛けました。サンパウロから飛行機でレシーフエまで三時間、靴と下駄とのちんばの足を引きながらの空の旅でした。結婚日まで三日、ようやく靴が履けるようになりました。結婚式も目出度く済ませ、直ぐ帰るつもりでおりましたが、折角遠い所まで来たのだから暫らく居るようにいってくれ、セアラー州のフォルタレーザ迄新婚の旅に同道してくれることになりました。

ペルナンブコを抜けパライーバ州のジョン・ペソア都を通り、リオ・グランデ・ド・ノルテ州のナタールで一泊、鳥取砂丘の何倍もの砂丘があり、沿道は何処までもカジュ園が続いていました。又其所此処に天然ガスが吹き上げているのも珍らしく、大小の石原の続いた所もありました。太古に地球の異変からこんな地表になったものでしょう。帰って九月になって小生らが通った地方に

地震があったと、テレビで伝えていました。
帰宅後、火災跡の仕末、小さなのみは溶けてしまい大きいものは焼きを入れ直して貰いましたが、やはり半数は使いものになりません。今度日本へ行くことでもあればもう一度新らしく買い入れたいと思っています。
昭和六十二年三月六日、六女結婚。十二月二十四日在伯石川県人会創立五十周年のお祝いがあり、石川県知事を始め県会議員数名に加わり、松任市会議員二期、海外石川県人会家族会々長の平田長嗣さんご夫妻も来伯され、盛大な祭典後、十日間の余暇でマリリアへ来て下さいました。小生らの古巣のアンデスの方も見て頂き、リノポリスの小野家へも立寄られ、忙がしい旅ながらリオ・デ・ジャネイロやイグアスー滝も見物されてお帰りになりました。
昭和六十三年一月二日、毎年お正月には各地に散在している子供たちが家族連れで来てくれるのですが、今年は五十三人が集まり、賑やか過ぎる有様でした。
火災後に建てた煉瓦造りの工房に一人喧噪を遁れて静かにお正月を過したものです。
男六人、女七人の子供がそれぞれ自分に適した仕事を選び仕事に励んでおります。孫も十八人になりました。昭和四年、一九二九年、両親に連れられて弟と四人で渡伯、五十九年間にこの人数になったことは、ブラジルならでは望めなかったのではとつくづく想います。年が明ければ妻ともども古稀のお祝いになりますが、まだまだ現役のつもりでおります。一昨年、子供たちが出資して、

南マット・グロッソ州のテーラ・ロッシャの一等地を買いましたので、小面積ではありますが、そこへ行って農作業を試みたいと思っています。子供の中には、イタリア系、スペイン系の女性を妻にしていますが、皆、仲良く暮しているようです。

かって岸本昂一氏が〝平田さん、自分らが果てる頃には、完全に同化していますよ。しかし、退化をしない中流以上と結婚させたいものです〟と申されましたが、現実になって来た訳であります。昔、ミゲール・コートという政治家が、日本人は同化しない民族だと　非難された時代もありましたが、移民八十年の今日になって、地下でミゲール・コートも喜んでいることでしょう。

亡父がよく申しましたが人並みに歩けば人並みに過ぎない。人さまが十歩行く間に十二歩行くことを心掛くべきこと。世の中で馬鹿らしいと思うことが出来るようになった時、始めて一人前になれたと思えと。今になって味わい深い言葉だと感じます。人間は一生修養だと思い、俳句に彫刻に更に励みたいと思います。

血も混り悔なくなごむ移民八十年

これから先、余生ある限り〝秒針の音の止まるまで〟頑張り続けたい念願をあらたにして、この稿を終りたいと思います。　有難うございました。

一一九八八年昭和六十三年四月二十日

マリリア郊外シャーカラにて　平田武夫

あとがき

日本移民八十年の年を迎えて過去を顧みますとき、ブラジル国は誠に平穏なる国でありました。同胞の中からも偉人が現われ、消えて逝ったものです。移民百年祭までは僅か二十年でありますが、この間にブラジルも変っていくでしょう。色々と社会問題が絡んでおりますことは周知の通りで、今のところ解決の見通しのつかぬまま、積んだり崩したりの繰返し、うなぎ昇りの悪性インフレ、重税の上に、下層階級の生活を脅やかす上に略奪・強盗などの頻発で、良民は大迷惑をしております。

原因があって結果があるのであり、又、過ぎたるは及ばざるに如かずの諺のように、第一の原因は、立派な首都リオ・デ・ジャネイロを放棄してブラジリアを造成した時に始まったことであることは皆様もお気付きのことでありましょう。議員さんたちも遠方の所へ通うのに大変な費用がかかることで議会に全員揃ったことがないといいます。

いま若し議員たちが四年間、無報酬で取組んで下されば民の暮しの内容も理解出来、民間での信用はいうに及ばず、外国への信用も回復、犯罪もはたと消えることでしょう。

かつてブラジルは地震のない国とされていましたが最近はそこここ、揺れ始めました。イタイプー発電所設置について北米の地質学者が、イタイプー完成の時には地殻を震動させることにより、

地下の火山系を揺り起こし地殻の浅い所から地震が起るといっていました。

少年の頃は嘘を吐くな、酒を飲むな、煙草を喫うなと教えながら大人になると、煙草、酒、嘘を吐く、これが当然とされていては良い社会が生まれる筈がありません。

現在までに最も尊敬に値いする偉人は印度のガンジーだけであったと存じます。世界中が武器を捨て、嘘のない偉人格者が男性十名、女性十名選出されて世界政治を司る時が到来すれば、地球上は真に浄化されることでありましょう。

先進国が相互扶助の精神で後進国を助けるのであれば、今日、どんなことでも即座に解決を見ることでありましょう。一日本の力だけで青函トンネルを貫通し、瀬戸内海に橋を架け、鳥取砂丘に特産物を生産するようになった時代です。何事でも克服出来ないことは無いと思います。太いパイプで海水を吸い上げて、砂漠地帯を潤せば椰子の栽培が出来、飢餓を食い止めることが出来ましょう。砂漠地帯であったテルアビフ地方も独立後、民衆の協力によって緑園に変った、ということです。

ブラジルの広大な上地を世界中に開放して、稠密な人口を吸収し、集約的農業を営み食料生産を高めれば　インフレは直ちにおさまりましょう。戦争のない犯罪のない平和世界の到来を夢見ながら、己れの限りの力を尺すことを誓って、あとがきと致します。

尚、本書の上梓に当り、マリリア日伯文化協会、マリリア、イッペ吟社、笹崎孝作氏、井原　攻氏、河北　穆氏の後援を頂き、原

文の校正、清記には瀬尾天村師にお世話になりました。
記して深甚の謝意を表する次第です。

一九八八年五月

平田武夫

TAKEO HIRATA
ESCULTOR
Chacara do Pombo-Cx. Postal 661-
Fone:22-2996
CEP-17.500-Marilia
Estado de Sao Paulo-Brasil